
ずっと好きでした

兼高由季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ずっと好きでした

【Nコード】

N2482E

【作者名】

兼高由季

【あらすじ】

柳瀬裕也は素行不良の美少年。彼とクラスメイトの少女との不器用な恋は、裕也の突然の事故死によって、呆気なく終わったはずだった。時を隔てた二つの悲恋から始まる奇跡の物語です。

プロローグ

お賽銭やお布施が多ければ、願い事が叶う確率は、それだけ高くなるものなのでしょうか？

救いを求めるならば、それに見合う何かをしなくては、ならないのでしょうか？

ギブ・アンド・テイクは人間界のルールです。

見返りを要求する存在が神であるうはずがない。

だから私は、神も信仰も、人間がこしらえたものにすぎないと考えていました。

でも、あの地獄絵図の中で、私は確かに神の声を聞いたのです。

千の迷える魂を導けと。

そうすればお前の望む奇跡を一つだけ起こしてやろうと。

千の迷える魂。

千の苦悩と悲しみを。

私が……。

私が？

はっ、おかしいですよね。

ありえない。

ありえませんがとも。

でも……。

見上げれば、焦土に降り注ぐ黒い雨。

果てなく降り注ぐ千の涙。

あなたにもう一度会えるなら、私はどんな試練にも耐えるでしょう。

1・迷える魂の案内人

雨の帳とばしで覆われたモノクロームの景色の中、密やかな雨の音を聞きながら、俺は一点を見つめていた。

濡れて黒ずんだ駅のホーム。

その傍らに置かれた場違いな花束。

風で飛ばされた一片の花びらが、すぐ目の前で少しずつ色をなくしていく。

その色から目を逸らすことができずに、無意識に唇をかみ締めた時のこと。

「柳瀬裕也さんですね」

頭上から、穏やかな声が降ってきた。

膝を抱えたまま顔を上げると、背の高い若い男が目の前に立っていた。

「あなた、誰だ？」

口について出た問いかけに、男は曖昧に微笑んただけだった。

ごく自然に声をかけてきた男の異常さに、俺はいまさらのように気がついた。

一つに束ねた黒い髪。

黒いスーツ、やや細身の黒いネクタイ、一点の汚れもない黒い皮靴。葬式の帰りのように何もかもが黒尽くめで、手にはこうもり傘を持っている。

右目を覆う黒い眼帯さえなければなかなかの美形だが、足音も気配も一切させずに現れるあたりは忍者か殺し屋か……。

いや、殺し屋ってことはあり得ないか。

「動き回られては困ります」

心の声に自分で突っ込みを入れた時、男が唐突に口をきいた。心なしか、少しだけ咎めるような口調になっている。

「俺がどこへ行こうと俺の勝手だろ」

背を向けた途端、いきなり肩を掴まれた。

強引に反転させられ、長身を折り曲げるようにして、顔を覗き込んでくる。

「まさかと思っただけど、泣いていらっしやったのですか!？」

片方しかない目を極限まで見開いた男は、互いの唇が触れそうなほどの近距離で、

素っ頓狂な声を張り上げた。

(悪いか!?)

「悪ありません。お気持ちわかります。わかりますとも」

あわてて涙を拭いながら心の中で言い返した言葉は、なぜか相手に届いていた。

男は何度も頷き、芝居がかったしぐさで天を、いや正確には、駅のホームの屋根を仰ぎながら、長く息を吐き出した。

「十七歳でしたっけ？ 私より八つもお若い。さぞかし心残りなことでしょう。でも、こればかりはどうしようも……ああ、そうだ、あなたは私の最後のお客様ですし、お話なら、いくらでもお聞きしますよ。とにかくそんなに警戒しなくても……。私って、そんなに不審人物に見えます？」

(見えるに決まってるだろ！)

「……そうですか」

心の声はまたも相手に届いていた。

「やっぱりねえ。この頃はいつもそうなんです。気をつけてはいるんですけどねえ」

悲しそうに肩を落としながら、男は足元に放り出していた傘を引き寄せた。

俺の言葉が妙な感じに心の琴線に触れてしまったようで、傘の先でホームに「の」の字を書きながら、いい訳めいたことを呟きだした。

「ジエネレーションギャップってものですかね。まあ、仕方ないか。六十年以上も経っているわけですから、人も世の中も変わるのが当然で……」

「お、おい！」
聞き捨てならない言葉を耳にして、俺は相手を遮った。

「六十年以上って、どういう意味だ？俺より八つ年上なら二十五だろ？六十年って何のことだ？」

「おや、お知りになりたいですか？」
片方しかない目が、どこか意味深に細められた。

「どうやら私に興味を持ってくださったようです。でも、そう簡単に教えて差し上げるわけにはいきませんよ。この世の中はギブ・アンド・テイク。そしてあなたは私よりも年下。あなたの疑問にお答えする前に、まずはあなた自身についてお聞かせ頂かなくては」

「話すことなんて何もない」

冷やかな俺の言葉に、相手は少し鼻白んだようだった。

「まあ、そう、おっしゃらずに。実は気になることがあるのです。」

この後の予定は入っていないと申し上げましたが、正確には一つだけ、ついでの仕事がありまして、それがどうやらあなたと関係が…

…」
「聞きたくないね!」

吐き出すように告げた途端、男の顔からすつと表情が抜け落ちた。

俺の腕から手を離し、ゆっくりと一歩後ずさる。

その背後で、止まっていた列車が動き出した。

いつの間にか増えていた乗降客が、佇立する男の身体をすり抜けていく。

「知りませんよ」

再び口を開いた時、男の口調は変わっていた。

向けられた笑みは、どこか機械めいていて、今度は俺が後ずさる番だった。

「私の名前は黒田圭吾。迷える死者の魂を導く案内人です。事前に知り得る情報は、氏名、死亡日時、死亡場所、死亡時の年齢のみですが、それだけわかっていれば業務遂行上の問題は特にありません。柳瀬裕也さん、あなたは十五日前にこの場所で亡くなりました。そして、そのことはあなた自身もご存知のはずです。でも、これから起こる悲劇についてはどうでしょう?」

よどみなく話し続ける男の一つしかない目は、もう笑ってはいなかった。

瞬き一つすることなく、じつとこちらの反応を伺っている。

迷える死者の魂を導くだなんて荒唐無稽だ。

だが、荒唐無稽なことが実際に起こり得るということを、俺は身をもって知っている。

男がこの場所に姿を現した時、いるはずの俺はいなかった。探しに行くことも考えたという。

だが、実際にとった行動は、「ついで仕事」の方の事前チェックだった。

「別件で向かった先で、はからずもあなたを見つけました。あの墓地には、あなたのお墓があったのですね。お墓の前に佇んでいた吉田比奈さんは、あなたのお知り合いなのでしょう?」

(どうして吉田の名前を知っている!?)

「さあ、どうしてだと思えます?」

ことごとく俺の心を読んでしまっ。

寒くもないのに、ぞっとするような悪寒が這い上がってきた。

2・墮天使と風紀委員

「裕也は私の天使よ」

上半身をもたげると、その先の動きを封じるように女の腕が絡み付いてきた。

「天使は天使でも、墮天使だけど」

十七年上の裸の女が、自分の母親とだぶりそうになって、俺は無意識に目を逸らせた。

カーテンを閉めなかったのは失敗だった。

もっと眠っていたかったのに、差し込む朝日で目が覚めた。

裸の胸に引き寄せられ、求められるまま、求められる場所に唇を寄せる。

いまさらカーテンを閉める気にもなれず、思考を停止させたまま、本能に身を任せるのはいつものことだ。

動物には発情期があるのに、どうして人間にはそれが無いんだ？
にごった頭でいくら考えたところで答えは出ない。

シャワーの音を聞きながら、流れる紫煙をぼんやりと目で追いかける。

タバコなんて好きじゃない。

でも、好きでもない女とのセックスは、タバコよりもはるかに後味が悪い。

ふと見れば、窓の向こうに透明な空が広がっていた。

爽やかな空の色に触発されたように、吉田比奈の顔が脳裏をよぎる。
心のどこかで、時間を気にし始めている。

学校に行くまでの段取りを頭の中でトレースしながら、夏の日にプ

ールのおあずけをくらった子供のように、俺はそわそわと落ち着かなくなる。

(何、やってんだ?)

小さく苦笑し目を閉じる。

シャワーの音はいつの間にか消えていた。

指摘されるまでもなく、俺は素行の悪い生徒だった。

トレードマークは黄金色に染めた髪と、左耳に並んだ三つのピアス。長すぎる前髪に半ば隠された顔は、甘ったるい女顔。

夜のまちを徘徊していると、いくらでも女が寄ってくる。

俺はそこそこ金回りの良さそうな、年上で一人暮らしの女しか相手にしない。

つまり、墮天使というよりは、ヒモみたいな男なのだ。

俺の名を知らぬ者は、校内に一人もいないだろう。

だが、注目度の高さでは、吉田比奈が恐らくナンバーワンだ。

吉田は俺の対極に位置する才色兼備の優等生。

俺たちは一年の時から同じクラスで、吉田が風起委員に立候補した瞬間から、二人の関係は決まってしまった。

手を抜くことを知らない彼女は、風紀委員の仕事にもとんでもなく熱心だ。

屋上でタバコをふかしていても、他校の生徒とけんかしていても、授業をさぼって昼寝をしていても、どこからとも現れる。

気にすまいと思うのに、俺の行動半径は次第に狭くなる。

さぼりたくてさぼっているのか、見つけて欲しくてさぼっているの

か、だんだんとわからなくなってくる。

河原に寝転び、流れる雲を目で追っていると、草を踏みながら近づいてくる小さな足音。

俺はなぜか嬉しくなる。

「授業をさぼって何をやってるの？」

「それはこっちのセリフ」

吉田は俺の顔を覗き込み、川風に髪とスカートを翻しながら、腕時計の文字盤をこちらに向けてくる。

「今すぐ戻れば、授業が終わる前に教室に入れるわ」

「ああ、そう、じゃあ、戻れば？」

「どうしてそんなことを言うの？」

言葉に言葉が返ってくる。

真っ直ぐな瞳がじっとこちらを見つめている。

はんぱでない目力に負けそうになった時、きゅっと引き締まった唇が笑みの形にほころんだ。

「ね、一緒に戻ろう？」

思わず誤解してしまいそうなほど優しい声。

俺は何も答えられない。

俯いた途端、差し伸べられた両手が目が入る。

国会議員を父に持つ良家の令嬢にふさわしいきれいな手。

それをはらいのけて立ち上がるのは、かなりの勇気が必要だった。

風紀委員だからという理由だけで、授業を放り出して、できの悪い生徒を探し回ることは、問題じゃないのだろうか？

俺は不思議でならなかった。

親は大物だし、吉田の成績は全国模試でもトップクラスだから、学校側も目をつぶっているかも知れない。

屋上から見下ろす景色は平和そのものだ。

蹴り上げたサッカーボールが大きくフライングするのを眺めながら、俺はコーヒー牛乳の紙パックを手の中で握りつぶした。

「それだけ？」

「悪い？」

振り返れば、吉田は三メートルばかり離れた所に立っていた。

いつも思うことだけど、一切の気配を消して近づいてくるわざは、どこで身に付けたのだろう。

「風紀委員は昼飯のことまで指導するわけ？ 念のために言ってお

くけど、屋上は立ち入り禁止なんだぜ」

「そんなことより、ねえ、聞いて？」

来るなと言う前に、横たわる距離を一気に詰めてきた。

屋上の手すりに手をかけて悪戯っぽく笑う顔は、教室で見せるのは全く別ものだ。

「私、風紀委員になるまで、授業をさぼったことも、屋上に登ったことも、夜の繁華街を歩き回ったこともなかったのよ。これって、すごいと思わない？」

目を輝かせて告げられても、こっちは反応に困ってしまっ。

「下らない」

そっけない言葉とともに取り出したタバコは、あっという間に没収されてしまった。

「タバコはやめようよ」

「今日はもうやめる。それが最後の一本なんだ」

だから返してくれと伸ばした手に、いきなりひっかけられた紙袋はずしりと重い。

「何、これ？」

「お弁当。私が作ったの」

「へえ」

大げさに驚いてみせてから、俺は意地悪く微笑んだ。

「ボランティア活動？ それとも恵まれない子供に差し出された愛の手？ 悪いな、俺は今ダイエット中なんだ。どうせなら、お前のファンにめぐんでやれよ。剣道部の鶴田とか、生徒会長の山下とか、涙を流して喜ぶぜ」

「鶴田君たちは、お昼をコーヒー牛乳で済ませたりしない」

紙袋をつき返されるのを恐れるように、吉田はゆっくりと後ずさった。

「ダイエットって言っただろ？」

「痩せすぎよ。ろくに食事もしないで、タバコを吸って、絶対に身体に良くない。お弁当を作ってくれる彼女とか……いないの？」

ものいいたげな瞳を向けられて、どうして良いかわからなくなる。補導員だって、こんな図々しい質問はしないだろう。

「お前さ、何が言いたいわけ？」

イライラが最高潮に達した俺は、紙袋を足元に下ろし、わざと乱暴に吉田の腕をつかんだ。

「心配してくれなくても、彼女はいるよ。現在進行形で五人ぐらい年上で、金払いが良くて、美人で、いつだってやらせてくれる。だから、品行方正な風紀委員どのに世話をやかれたって、わずらわしいだけだ。それとも、あんたも、やらせてくれるのか？」

こわばった吉田の目から、じんわりと涙が浮かんできた。

少し脅して遠ざけるつもりだったのに、白い頬を伝って流れていくそれを見つめたまま、俺は金縛りにあつたように動けなくなる。

「目を……閉じて」

どうしてそんなことを口走ってしまったのか。

こいつのまつすぐな瞳は、いつも俺を混乱させる。

だからといって、目を閉じさせて、どうするってんだ。

「失言。今のはなし」

身を翻そうとした途端、さえぎるように吉田の手が伸びてきた。

シャツをつかんだ手が震えている。

吉田は無言で目を閉じた。

淡い色の唇。

ほのかに漂う甘い香り。

昼休みの終わりを告げるチャイムの音。

軽い酩酊の中で俺も目を閉じていた。

ためらいがちに触れた唇はふわりと柔らかで、その感触にひかれるまま、もう一度唇を重ねようとしたところで、いきなり現実に引き戻された。

恐慌を起こしたような男の叫び。

「何をしているー！」

屋上中に響き渡る大声は麻賀雄介のものだった。

二十代半ばの体育教師は、ものすごい勢いでこちらへ駆けてきた。

「ちよっ、ちよっ……」

待てという暇もない。

一方の手で俺の胸倉をつかみ、もう一方の手で強烈なパンチを繰り出してきた。

とっさにかわしていなければ、顎の骨が砕かれても不思議はないわけで、勢いあまってたたらを踏む相手の背中を蹴り飛ばしたのは、明らかに正当防衛のうちだろう。

無様につつぶしたまま、ギロリとこちらを睨んだ男の目は、狂気をはらんで血走っていた。

棒立ちしている俺を背後にかばうようにして、吉田が前に進み出た。

「先生、誤解です。柳瀬君は悪くありません」

きっぱりと言い放った時、吉田はいつもの吉田に戻っていた。

「気分が悪くて、少し風に当たりたかったので、柳瀬君に屋上に連れて来てもらってきていたんです」

「だが、屋上は……」

「立ち入り禁止なのを忘れていました」

氣勢をそがれた教師に一礼して、吉田はくるりと背を向けた。

それから紙袋を拾い上げ、俺を追い立てるようにして屋上を後にした。

「女に助けられたのは初めてだ」

「借りを返したければ、これ、ちゃんと食べてよね」

階段を下りる足を止め、振り返った顔はほのかに赤い。差し出されたものを素直に受け取りながら、俺もつられて赤面してしまう。

「午後の授業は……」

「出ようよ？ 数学、好きでしょう？」

まっすぐこちらを見つめたまま、吉田はよどみなく言葉を紡ぐ。きちんと相手の目を見て話すのは、性格もあるだろうけど、多分、育ちの良さによるものだ。人に知られたくないことなど何一つなければ、目を逸らす必要もない。

「別に好きなわけじゃない。答えが一つしかないから他の科目よりましなだけだ」

「答えがいくつあったって、かまわないと思うけど？」

「でもさ……」

学校一の才女と、なぜ、こんな話をしているのだろうか？ いい加減に打ち切りたいのに、なぜか言葉は止まらない。

『以下の文章を読んで、作者の心情を五十字以内でまとめよ』なんて問題はお手上げなんだ」

「ふーん、どうして？」

「他人が考えていることなんて、わかるはずがないだろ？」

「そうね。でも……」

吉田はそこで言葉を止めた。

気がつけば、教室の前にたどりついていた。

授業はとつくに始まっているというのに、吉田はためらいもなく扉を開く。

「気分が悪くて、柳瀬君に付き添ってもらって、保健室で休んでいました」

俺の名前が出た途端、教室が小さくざわめいた。

吉田は本当に嘘つきだ。

罪のない嘘を、その場の状況に合わせて縦横無尽につきまくる。そしてその嘘は見破られない。

「大丈夫なのか？」

案の定、教師は気遣わしげな言葉を投げてきた。

「はい」と慎ましやかに返事して、吉田は静かに席につく。

「柳瀬、ご苦労だったな」

「いいえ」とぶっきらぼうに呟いて、俺も仕方なく席についた。

教室のざわめきはまだ続いている。

尾ひれのついた噂が流れていくのだろう。

苦い思いで、窓の外を見た。

俺なんかとキスしたことを、吉田はいつか後悔するだろう。

天使なんていいもんじゃない。

記憶の中の幼い俺は、公園の隅にしゃがみこみ、いつも腹をすかしていた。

着ている服は汚れていて、誰からも相手にされなかった。

水商売の母親はいつまでも若く美しく、家には若いヒモみたいな男が入り浸っていた。

父親のことは何も知らない。
母親は俺のことなど見向きもしない。

高校進学が決まったと同時に家を出た。

学費も生活費もアルバイトで何とかするつもりだったけど、食うや食わずの暮らしの中、気がつけば俺自身がヒモみたいになっていた。

夜が近づくと、ポケットの中のケータイからひっきりなしにメールの着信音が聞こえてくる。

「おいしいもの食べに行かない？」とか、「寂しいの。慰めて」とか、文面は色々だけど、結局やることはおんなじだ。

たまらなくなつて、川に携帯を投げ捨てた。

小さな水音が耳朶を打つ。

橋の欄干から身を乗り出すようにして小さな波紋を見つめると、背後から腕を掴まれた。

振り返ると、吉田比奈が深刻な顔をして立っていた。

この先に有名な進学塾がある。

塾へ行く途中の吉田にこんなところで出くわすとは、完全な誤算だ。

「何をしているの？」

「水音がしたから覗いてただけ。こんな汚い川でも魚がいるのかと思っただけ」

「どこへ行くの？」

「風紀委員長殿とは縁のない所。俺は犯罪者じゃないんだし、お前は刑事じゃないんだから、聞かれても、もう何も答えないからな」

突き放すように告げて背を向けた。

橋の上に佇んだままじっとこちらを見ていた吉田は、一緒にいた連

中にひとことふたこと何か言ってから、俺の後を追いかけてきた。

わざと猥雑な裏通りを選んで歩く。
夕暮れから夜に変わっていく街を、様々な色のネオンが彩り始めても、俺は歩度を緩めなかった。

「明日からテスト週間なんだけど」

大股で歩く俺を必死で追ってくるクラスメイトは、早くも肩で息をしている。

下らぬ追いかけっこにウンザリして、俺は盛大なため息をついた。

「そういうお前が帰れば？　こんな所をウロウロしていたら、変な奴らにつかまって、速攻、やられちまうぜ」

見開かれた瞳に怯えの色が宿る。

不安げに周囲を見回し、すぐるように俺を見た。

「一緒に帰ろう？」

「いや」

「いじわる」

「何を今さら」

笑って聞き流すと、吉田は唇をかみしめた。

泣きそうな顔をしているくせに、どこまでも歯を食いしばってついてくる。

彼女を突き動かしているものが何なのか、俺にはさっぱりわからない。

雰囲気の流れされてキスしたことは、妙なシチュエーションが作り出したアクシデントに過ぎない。

吉田比奈は絶滅の危機に瀕している純日本的な美少女だ。

お嬢様育ちで、少し天然なで、いつも颯爽としているくせに、俺の前では別の顔を見せる。
好奇心旺盛で、自信に満ちていて、外見だけが取り得の俺とは全く別の生き物だ。

何も知らないのだから、触れてはならない。

汚してはならない。

近づいてはならない。

だから、俺のことなんて、放っておいてくれ。

派手なネオン街のあちこちには、薄汚い連中がたむろしている。

右を見ても、左を見ても、制服姿の美少女を見て舌なめずりしている男ばかりだ。

俺との距離があと少しでも広がれば、連中はすぐにでも行動を起こすに違いない。

根負けした俺は、不機嫌をあらわに、もと来た道を歩き出した。

吉田がほっとしたように、息を吐き出す気配がした。

「風紀委員なんか、やめれば？」

「どうして？」

吉田の家に続く道を並んで歩きながら口を開くと、批難するような目を向けてきた。

頭が良いくせに、なぜ、わからないのだろうか？

俺を追いかけていて、迷子になって、車に連れ込まれそうになっただけじゃないか。

塾に行かなかったのがばれて、親に叱られたんだろう？

一緒に授業をさぼって、いったい何の得になる？

妙な噂がたっていることを知っているか？

お前を傷つけたくはないけど、またあんな状況に陥ったら、俺のなけなしの理性なんか吹き飛んでしまう。

理由なら、いくらでもある。

だが、結局のところ、それらを口にする機会はずっと失われてしまった。

「比奈ちゃん？ 比奈ちゃんなの？」

高い塀に囲まれた屋敷の門の前に佇むシルエットは、吉田の母親のものだった。

小走りにこちらに駆けてきたその人は、吉田の腕をつかんで自分の方へと引き寄せた。

普段着とは思えないほどきれいな服を着て、髪を上品にまとめていて、吉田とよく似ている。

やましいことなどありはしないのに、俺は相手の視線を避けるようにして目を逸らした。

「塾の先生からお電話を頂いたのよ。一体どこへ行ってたの！？」

「委員会が長引いただけよ。こちらは同じクラスの柳瀬裕也君。一人で帰るのは危ないからって、わざわざ送ってくれたの」

制服を着崩した金髪少年は、どうやら奥様のお眼鏡にはかなわなかったようだ。

その証拠にこちらに向き直った母親は、俺を頭の前から足の先まで見て、強張った微笑を唇に刻み込んだ。

「お世話になりました」

ひどく平板な声だった。

アンドロイドが口をきいたら、ひよっとすると、こんな感じかも知れない。

母親に連行されながら、吉田が小さく手を振る。

振り返ることなど、できるはずがない。

俺はこぶしを握り締めたまま、気付かないふりをした。

3・人壽は定まりがたし

「それで、どうなさったんです？」
いつの間にか目の前にしゃがみ込んでいた黒田が、片方しかない目を見開いて、身を乗り出してきた。

「どうって……」

笑ったつもりだったのに、思ったように笑えなかった。
無様な笑みを引つ込めた俺は、片方の膝をかかえなおし、赤茶けた線路を流し見た。

「それで終わりさ。ジ・エンド。俺はまっすぐここに来て、列車に轢かれて死んだんだ」

うそ寒い沈黙の中、男がかすかに身じろいだ。
その傍を何人もの人が行き過ぎる。
にわかに聞こえてきたアナウンス。

少しかすれ気味の男の声は、あの日と同じものだった。

眼前の光景があいまいに溶け、鮮烈な記憶がその上に重なっていく。
あの日、暗い空には星ひとつなく、駅のホームは真昼のように明るく、所在なく佇む俺の頭上では、白っぽい蛾の群れが照明にまとわりつくように飛んでいた。

列車の通過を告げるアナウンスが流れ出し、ホームに立っていた人たちが、一斉に同じ方向に首を動かした。

轟音を撒き散らしながらこちらに向かってくる金属の固まり。
妙な威圧感を感じてわずかに後退した時、渾身の力を込めたような激しさで、いきなり背後から突き飛ばされた。

あっ、と思ったが、声にはならなかった。
バランスを失ったまま、生々しい予感に襲われた。

一瞬の浮遊感とともに、線路に投げ出された肉体は、立ち上がろうともがくだろう。

だが、その行為の半ばで、突っ込んできた列車に轢きつぶされてしまふのだ。

飛び散る鮮血。

ホームに佇んだまま息をのむ人たち。

(死にたくない！)

最後に浮かんだ切迫した思いは、強烈な衝撃に押しつぶされた。
視界が真っ赤に染まり、そして、瞬時に暗転した。

痛いとか、苦しいとか、そんなことを感じるひまもなく、俺は全てを失ってしまった。

「人寿は定まりがたし」

呪文でも唱えるかのように、黒尽くめの男が低い声で呟いた。

「……禾^{かが}稼の必ず四時を経るときにあらす。十歳にして死するものは十歳中おのずから四時あり。二十はおのずから二十の四時あり。三十はおのずから三十の四時あり。五十、百はおのずから五十、百の……」

「何、それ？」

「おや、吉田松陰の留魂録をご存知ありませんか？」

黒田は不満げに目を細めたが、あっさりと首を横に振った俺を見て、ふっと微苦笑をもらした。

「私の子供の頃はうんざりするほど聞かされた名前ですが、やっぱりジャネレーションギャップなんですかね……あ、でも、誤解なさないで下さいね。私はこの人、全然、好きじゃありませんから」「いやむしろ嫌いです。そんな風に断っておいてから、黒田は吉田松陰とやらについて話し始めた。

江戸時代に終わりに長州 今の山口県に生まれ、松下村塾という名の私塾を開き、弟子たちを過激な革命家に育て上げた名代のアジテーター。

自分自身は幕府に捕らえられ、反逆罪で処刑され、彼の弟子の多くも革命半ばで非業の死を遂げた。だが、その意思を継ぐ者たちによって、ついに革命は成し遂げられた。

「当時の幕府は確かに衰退していたようですが、革命家たちが作り上げた新政府よりは、ましだったような気がします。力づくで政権を奪い取った連中は、今度は力づくで国を広げようとした。天皇は神。日本は神の国。そのために命を捨てるのは国民の義務。松陰とその弟子たちのように国のために命を捨てよと……」

遠い目をして語り続ける黒田の表情は暗く沈んでいる。

喪服のような黒いスーツを着て、片方の目を眼帯で覆った男は、松陰とその弟子たちについてひとしきり語った後、憂鬱そうに吐息をついた。

「さっきの言葉はですね、穀物は四季を経て収穫を得るものですが、

人の一生はそうはいかない。しかし、十歳で亡くなった人の一生にも、その人なりの四季があり実りがあり、二十歳、三十歳で亡くなった人の場合もそれは同じで、若くして死ぬことになってても嘆くには及ばないと……まあ、そんな意味なのですが……二十九歳で処刑された男が牢獄の中で弟子のために残した遺書ですからね。あなただって同意なんかできないでしょう？ 十七歳で終わった生涯に四季や実りがあると思いますか？」

「思っていたら、こんな所にはいない」

「ああ、確かに。どうやら、愚問だったようですな」

「でも、もう、どうにもならないんだろ？」

「残念ながら、奇跡でも起こらぬ限りは」

申し訳なさそうに声を落とした男が、ゆっくりと背後を振り返った。けぶるような雨の向こうに細い影が差したのはその時だ。

俺はこぶしを握りこみ、なすすべもなく目を伏せる。

静かに階段を降りてきた少女は、制服の腕に白いバラの花束を抱えていた。

4・こづもり傘

吉田が日に日にやつれていくように見えるのは、気のせいだろうか。手にしたバラの白さにも負けぬほど、血の気の失せた顔は蒼白だった。

俺は思わず立ち上がり、吉田に向かって両手を差し伸べた。けれども実体を失った手は、そよ風ほどの影響も相手に与えることができなかった。

「柳瀬君……ひどいよ」

吉田は小さく呟いた。

さっきまで俺が座り込んでいたホームの柱に歩み寄り、一日でくたびれてしまったサーモンピンクのバラを悲しげに見下ろす目は涙で赤い。

列車を待っていた人たちが、それぞれの動きをとめて振り返る。その存在の儚さと危うさに、誰もが息を飲むようにして、制服姿の少女を見つめている。

「吉田、もう泣くな、泣いたって何も変わらない」
しおれた花びらの上に滴る涙が水滴を作るたび、俺はなすすべもなく唇をかみしめる。
すぐそばにいるのに、祈りにも似た言葉は、決して少女の耳には届かない。

どれだけ時が過ぎただろう。

周囲のことなど全く意に介さぬかのように見えていたのに、ホーム

に近づいてくる列車の音に反応し、吉田はゆっくりと顔をあげた。

「おい、何を考えている!？」

問いかけに答える代わりに、吉田はふらりと立ち上がり、どこかおぼつかない足取りで吸い寄せられるように線路の方へと歩いていく。俺は急に恐ろしくなり、吉田の周りをグルグル回りながら、少し離れた所に立っている長身の男を流し見た。

「黒田、止めてくれ!」

「あなたにできないことが、私にできるわけがないでしょう?」
あっさりと答えを返してきた青年は、あろうことかこちらに背を向けて、ホームの時計を見上げている。

「てめえ、ふざけるな! 何でもいいから、吉田を止める!」
俺の絶叫は黒田以外の誰の耳にも届かない。
ホームにいる連中は、不安げにこちらを見ているだけで、誰も動こうとしない。

通過する列車が勢いよくホームに走りこむ。
ヒーローよろしく駆けつけて、吉田を背後から抱きしめたのは俺のよく知る人だった。
ぶわつと吹き付けてきた突風が、バラの花びらを宙に躍らせた。
その花びらが俺の足元に散らばった時、ホームを一瞬で通過した列車は、マツチ箱ほどの大きさになっていた。

「麻賀先生?」

意外にもしつかりした声に、ホームのあちこちから、ほつつと安堵のため息が漏れる。

麻賀もほつとしたように息をつき、男らしい節ばった手で吉田の頭

を何度も撫でた。

「もう、ここに来るのはやめなさい」

かつて屋上で垣間見せた狂気など微塵も感じさせぬような優しい口調。

駆けつけてきた駅員に事情を説明した青年は、教師の鑑とも言える折り目正しさで「うちの生徒がご迷惑をおかけしました」と頭を下げた。

少女を抱きかかえるようにして去っていく後姿を、女たちがうつとりと目つめている。

次第に小さくなっていく足音を聞きながら、俺は自分の無力さに絶望し、ずるずるとホームにしゃがみこんだ。

「まあ、元気を出して。とにもかくにも、吉田比奈さんが無事だったのだから、良かったじゃありませんか」

脳天気な声を耳にした途端、忘れかけていた怒りがこみ上げてきた。俺の中で何かがブツリと音をたてたのはその時だ。

「さっきのは何だ！ お前それでも人間か！」

すばやく立ち上がり、目の前の男の肩を猛然とつかんで揺さぶった。片方しかない目を白黒させながら、黒田は銃を突きつけられたかのように降参のポーズをとっている。

「ま、待って下さい、何もできないと申し上げたのは嘘ではありません。私もあなたと同じです。生身の人間はこの身体を全て素通りしてしまうのですから、助けようがないじゃないですか！ それに

……」

「それに、何だ!？」

「それに、私にはわかるんです。吉田比奈さんは絶対に大丈夫です。ただし、保証してさしあげられるのは……」

拘束から逃れた男は、上着の胸ポケットから懐中時計を取り出した。「あと……二日と……十三時間です」

長い逡巡の後、ようやく搾り出された声は消え入りそうに小さくて、俺はその言葉が嘘ではないことを瞬時に悟ることになる。

「ふざけるな！」

「残念ながら、ふざけていません」

「吉田が死ぬなんて、だめだ、そんなの！」

「だめと言われても、人にはそれぞれ寿命というものが……」

「何が寿命だ！ 松陰は嫌いだって言ってたじゃないか！ そんなに簡単に諦めるな！」

「ま、まあ……そうですけど……」

言い訳めいたことを呟きながら、黒田はホームに腰を下ろした。長い足を組み、頬に手を当てて考え込む背中に、水銀灯の青白い光がほのかに映じている。

俺はじりじりしながら、続く言葉を待ち続けた。

最終列車がホームを出る直前に雨はやみ、汚れを洗い流した夜の向こうには、欠けた月が浮かんでいた。

「おや、下弦の月だ」

早くも考えることを放棄したのか、黒田は空を見上げて呟いた。

「かげんの……何？」

「月の呼称もご存知ないのですか？」

どこかのん気な呟きに、反応したのは失敗だった。

黒田はこちらを振り返り、哀れむような眼差しを向けてきた。

「月の名前なんか知らなくても、ちゃんと生きていける」

「知っている方が、より豊かに生きられます」

それぞれの自己主張をした後、二人同時にほろ苦く微笑んだ。

死んでしまった人間が、今さら人生観を語り合った所で空しいだけだ。

「まあ、ものは考えようですよ。吉田比奈さんと死んでからも一緒にいられると思えば、悪いことばかりではないのでは？」

どこからそんな言葉が出るのだろうか？

そういう自己中な考え方が一番嫌いだと応えると、よっぽど意外だったのか、黒田は片方だけの目を見開いた。

「柳瀬さん、あなたって……」

「なんだよ」

「外見だけじゃなくて、心もとってもきれいなんですね。色い로운人を見てきたからわかるんですよ。人間はそもそも自己中心的な生き物で、自分を生かすためなら、人殺しだって、何だって……あ、ちよつと！」

すつくと立ち上がった俺を見て、黒田もあわてて立ち上がる。

つかまれた腕を力任せに振り払うと、傘の柄で首根っこをとらえられた。

「ふらふらされては困ります。いったいどこへ行くつもりです？」

「吉田の所に決まっているだろ！」

「行ったって何もできませんよ。さっきだってそうだったでしょう？」

「わかってる！ でも、守りたいんだ！」

涙目の俺を見て、黒田は動きを停止した。

「あなたの辛い気持ちはわかります。手遅れだとわかっていても、動かすにはいられないお気持ちも……」

「手遅れなんかじゃない！ 現に吉田は生きている！」

「ええ、そうですね。まさしくおっしゃる通りです」

男の唇が悲しそうに微笑んだ。

「じゃあ、これを持って行ってください」

何が出てくるのかと、思わず身を乗り出した。

一瞬の期待を裏切つて、黒田がうやうやしく差し出したものは、例のこうもり傘だった。

雨はやんでいる。

いや、たとえ降っていた所で、濡れることはない。

「で、これを俺にどうしろと？」

「私があなたにして差し上げられることはこれだけです」

全くわけがわからない。

仕方なく礼を言って受け取ると、黒田は情けなさそうに目を伏せた。

5・永遠の足かせ

「百合さん、私のような凡人に奇跡を起こすことなんて、本当にできるのでしょうか」

どんなに待っても、答えが返ってくることはない。

柳瀬裕也がそうしていたように、ホームの柱に背をあずけ、両膝を抱え込んだまま、黒田は悲しく微笑んだ。

「聞いて下さい。ようやく千人目にたどりついたんです。思えばあの日から六十五年もの年月が流れてしまった。あ、でも、ご安心下さいね。あなたのことは一分一秒たりとも忘れたことはありませんから」

しゃべり続ける声は相手に届かない。

それでも、しゃべらずにはいられない。

生きている間も、肉体を失った後も、そうすることで、辛うじて自分を保ってきたのだ。

「ただ、彼……柳瀬さんを見ていると昔の自分を見ているようたまらなくなるんです。こんなことになるのなら、ついで仕事など放棄すべきでした。彼がこれから起こる悲劇に耐えられるとは、私にはとても思えない」

打つ手が全くないわけではなかった。

そして、そのことが、黒田を苦しめ続けている。

色々なことを考えてしまうのは、きっとこの場所のせいだ。

不毛な一人芝居を打ち切って、黒田はゆるりと立ち上がり、無人の

ホームに目を走らせた。

駅のホームというものは、どこもみな、どうしてこんなに似ているのだろうか？

いや、違う。

駅のホームであるという事実を除けば、本当は何一つ似ていない。

六十五年前のあの日、東京駅のホームは出征兵士を見送る人たちで埋め尽くされていた。

うち振られる日の丸の小旗。

あちこちで始まる万歳三唱。

それらを冷めた目で傍観していられたのは、息も絶え絶えの様子で百合が現れるまでだった。

乱れた髪が、着物の袖が、ホームを吹き抜ける風に翻る。

足元のおぼつかない、瀕死の蝶のような姿に瞠目した。

屋敷に閉じ込められていたはずなのに、どうやって抜け出したのか。しかもこのご時勢に、豪奢な振袖を身にまとって！

「百合さん！」

大声で叫んだ時、蒸気機関車がゆっくりと動き出した。

灰色の煙が視界をかすませていく中、人に押され、よろめきつまずいたその人は、崩れるようにホームにしゃがみこんだまま、じつとこちらを見つめていた。

それが百合を見た最後になった。

列車から思わず身を乗り出したあの時、ただひとこと、「好きだ」と告げることができたなら、何かが変わっていたのだろうか。

伝えることができなかった思いは、永遠の足かせとなって、今も自

分を縛り続けている。

6・鮮やかな過去

幸せになって欲しかった。

それなのに、どこでどう間違ってしまったか。

百合の父親は篤志家で、広大な庭園を持つ屋敷の離れに数人の書生を住まわせていた。

書生たちは皆、当主の郷里でもある広島出身で、自分もその一人だった。

「お嬢さん」

「名前で呼んで下さい」

「では、百合様と」

「名前になった途端、様が付くのはおかしいと思います」

きっぱりと告げられて、少し逃げ腰になりながら、ようやく聞き取れるぐらいの小さな声で「百合さん」と呼んでみた。

「はい、黒田さん」

そう言っただけ、にっこりと笑った顔があんまり愛らしかったものだから、しっかき三十秒は相手の顔を凝視した後に、肝心の用件を忘れてしまった。

そんな間抜けな書生に、なぜ、彼女は心を開いてくれたのか。

初めて会った時、四つ年下の彼女はわずかに八歳。

生きて動いていること自体が奇跡のような美少女で、幼いながらに高貴な雰囲気をもとって、つまりは、幼い頃に両親をなくして祖母に育てられた田舎者の自分とは別世界に生きる人だった。

年よりもずっと大人びて見えたのは、たぶん、彼女の生い立ちによるものだ。

当主の正妻には子ができず、百合は妾の子なのだという。

実の母親はとうに亡くなったというが、書生ごときに家の内情を詳しく教えてくれる人などいないから、実際の所、よくわからない。

父親は仕事で飛び回っていて、滅多に屋敷には戻らない。

義理の母親は妾の子になど、見向きもしない。

大勢いる使用人たちも、女主人に気をつかつてか、百合に対する態度は冷たかった。

幼い彼女は滅多なことでは笑わない。

それでいて、心を許した者にだけは、花のような笑顔を見せる。

上野の桜、両国の花火、根津権現の秋祭……。

家人の目を盗んで二人だけで出かけることは、かなりの勇気が必要だった。

家人の怒りを買って追い出されれば行く所がない。

それでも百合の喜ぶ顔が見たくて、何度も屋敷を抜け出した。

世の中はだんだんときな臭くなっていたけど、流れ行く日々はまだ穏やかで、当時の関心事と言えば、高校受験と百合の体調のことぐらい。

百合は季節の変わり目になると熱を出し、寝床から起き上がれなくなる。

おざなりな看病しかしない使用人を追い出して、百合の枕元で本を読みながら、少し複雑な気分でもあった。

学校を休みがちな百合のため、何人も家庭教師を付けているくせ

に、若い書生が令嬢の枕元に付き添っても、周囲はまるつきり無頓着なのだ。

「お友達がね、黒田さんのことを色々と聞きたがるの。ほら、昨日お見舞いに来て下さった美智子さん、貿易商のお嬢さんなのだけど、黒田さんのことが気になるみたい」

さぐるような目を向けられて、思わず吹き出しそうになる。女の子は本当にませている。

百合もその友達も、まだ十三歳なのに。

「お父様が、黒田さんは将来有望だとおっしゃっていたわ。一校の法科を目指していらっしやるんですって？ その後は帝国大学に進んで、将来は政治家になられるのでしょうか？」

「だんな様の期待にお応えしたいとは思っていますが……」
そのためにも、まずは高校に合格しなくては。

多少の焦りとともに、枕元で本を広げると、百合は急にわがままになる。

水蜜桃が食べたい。

話し相手になつて欲しい。

しまいには、受験なんてやめればいいのと言い出した。

「そんなことになる、ここにいられなくなります」
もてあまし気味に訴えると、いきなり枕が飛んできた。

「わっ」と背後に仰け反りながらも、危ういタイミングでキャッチする。

上半身を起こした百合は、潤んだ瞳でこちらを睨みつけていた。

「一校に合格したら、来年の春には寮に入るのでしょうか!? いなくなるのは同じじゃない!」

「ええ、でも、それは……」

「そしてその後は大学の寮に入って、もう、ここには帰っていらっしやらないのでしょうか?! だったら……せめて……あと少し……」
声はだんだん小さくなり、しまいの方は聞こえなくなった。

何かをこらえるように、作り物めいた繊細な指がぎゅっと布団の端をつかんでいる。

そうだった。

勉強の邪魔をする理由なんて、一つしか思い浮かばない。

百合は寂しいのだ。

「ご心配なさらなくても、お休みのたびに帰ってきます」

「本当? 本当に!?!」

向けられた瞳の必死さに、切ないほどの愛しさが胸にあふれてくる。透き通るように白い肌も、折れそうに華奢な身体も、色素の薄い髪も瞳も、全てがその存在の希薄さを物語っているようで、許されない行為だとわかっていても、抑えることができなかった。

壊れ物を扱うようにそつと腕の中に閉じ込めると、ふわりと甘い香りが出た。

百合には親の決めた許婚がいて、十八になると同時に祝言をあげることになっている。

一回りも年の離れた許婚はエリート中のエリートで、帝国大学を卒業し、今は朝鮮総督府に勤務しているという。

「本当ですとも。百合さんが望んで下さる限り、私は必ず帰ってきます」

ます」

薬が効いてきたのだろう。

耳元で誓いの言葉を紡ぐと、少女は安心したように微笑んで、吸い込まれるように目を閉じた。

十三歳の少女が自分に寄せてくれる思いは何なのか。

十七歳の自分が少女に寄せる思いは何なのか。

ふと浮かんだ疑問は、答えを出さぬまま、葬ってしまう他はない。

夜が静かに更けていく。

「どこにいても、ずっと祈っていますから、誰よりも幸せにおなりなさい」

言葉の変わりに聞こえてきた小さな寝息に、いつまでも耳を傾けていたかった。

7・早朝のセンチメンタル

視界を遮る高い塀。

正面の門柱にはセコムのステッカーが貼ってあったけど、誰にも見咎められることなくこの塀を乗り越え、吉田の部屋に忍び込むことは、今の自分にはそれほど難しいことではなさそうな気がした。

でも、部屋に入り込んだ所で、この姿は見えない。

声だつて聞こえない。

第一、寝込みを襲うようで気がひける。

「行つたつて何もできませんよ」と言い切つた黒田の言葉が今さらのように蘇つてきて、結局は塀を睨みつけたまま、一夜を明かしてしまつた。

墨色だつた空がだんだんと色を変えていく。

濃い群青、青、紫、茜色、そして……。

金属音に振り返ると、自転車がこちらへ向かつて坂をのぼってくるところだつた。

目深にキャップをかぶり、グレーのパーカーを着た少年が、四角いカゴ一杯に新聞を詰め込んだ自転車のペダルを重そうに踏んでいる。

そう言えば、ほんの短い期間だつたけど、新聞配達をしていたことがある。

暗いうちに家を出るのだが、カゴの中の新聞が三分の一にまで減つたあたりで夜が明ける。

濃い群青、青、紫、茜色、天然のグラデーションを見ていると、無理やり暗記させられた枕草子の冒頭が、きまつて口を付いて出た。

「春はあけぼの。ようよう白くなりゆく、山ぎわ少しあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる」

古典の授業は嫌いだったけど、吉田の朗読を聞くのは嫌いではなかった。

予習は完璧だから、途中でつかつかかることはない。

よく通る澄んだ声が教室に流れ始めると、ノートのすみにラクガキしていたやつも、漫画を隠し読みしていたやつも、それぞれの活動をいったん中止して、その声に耳を傾けた。

陰気な顔で佇む俺のすぐそばを、坂を上りきった自転車が通過する。新聞が新聞受けにおさまる乾いた音を残して、もと来た道に戻っていく。

「お疲れサン」

かけた言葉は、相手から何の反応も引き出せぬまま、朝の空気に吸い込まれていった。

出てきた吉田は、昨日よりさらにやつれて見えた。

心配そうに付いて来た母親に弱々しい笑顔を向けてから、さきほど自転車が行き来した坂道を下っていく。

坂の途中のバス停に立ち、しばらくバスを待っている風情だったが、学校へ向かうバスをやり過ぎ、全く別のバスに乗った。

無意識にポケットの中を探っていた俺は、自分の立場を思い出し、そのままバスに飛び乗った。

8・不思議な傘

真新しい墓石には「柳瀬家之墓」と刻まれている。

十九歳で俺を生んだ母親は、自分のことしか考えない女だけど、若くして死んだ息子の墓だけは作ってくれたようだ。

（この石の下に俺の骨があるなんて……）
うんざりしながら髪をかきあげた。

視界が妙に暗いから、髪の毛のせいかと思っただけそうじゃなかった。透明だった空に、いつの間にかいやな感じの雲が広がっている。

この時期の天気は本当に気まぐれだ。

陰鬱な空は墓地にはふさわしいものだけど、やはり空は青い方がいい。

「柳瀬君、今日はお花を持って来れなくて、ごめんね」
その声だけで、心がずんと重くなる。

「下らないことで謝るな」
吉田の頭をこづくふりをして、近くの墓石にもたれかかった。

「その花だって、まだきれいじゃないか。学校をさぼって、毎朝、毎夕、死んだクラスメイトの墓参りなんかして、どうなるっていうんだ？」

「でも、どうしても、来たかったの」
顔を片手で覆ったまま、皮肉に笑った。
ちゃんと会話が成立しているじゃないか。

「ねえ、聞いてくれる？」

「いいよ、何？」

我ながら絶妙の間合いだった。

少しの違和感もなく、吉田は言葉を紡ぎ始めた。

「柳瀬君って、嫌いな授業には出てこないし、好きな授業でも寝てるし、複数の年上の女の人と同時に進行で付き合ってるし、昼食を抜いてダイエツトだなんて強がってるし……」

「は？」

俺は軽くのけぞった。

このシチュエーションで、そんなことを口にされても、困惑する他はない。

「でも一番強烈だったのは入学式の日。式の後、教室オリエンテーションがあったんだけど、一人の男子生徒が学校の塀を乗り越えるのが教室の窓から見えたの。羽根でも生えているみたいに、ふわっと地面に着地してね。髪が金色に輝いてすごくきれいだった。すぐに見えなくなっただけで、いきなり教室のドアが開いて……後は言わなくてもわかるわよね。本当にびっくりしたわ。金色に輝いてたんじゃなくて、本当に金色だったんですもの」

「悪かったな、不良で」

ふてくされながらも、俺は吉田から目が離せないでいた。

黒田の言葉が事実なら、吉田は明日の午後十時三十二分に死んでしまっ。

病気で死ぬことは考えにくいから、事故か、あるいは……。首を振って、浮かんだ思いを打ち消した時、重く垂れ込めた雲から

冷たい雨が降り始めた。

雨に濡れながらも、吉田は墓の前にしゃがみこんだまま動こうとしない。

持っていたこうもり傘を開いた俺は、傘を突き抜けた雨が地面を濡らすのを見下ろして、盛大なため息をついた。

雨を通す傘に何の意味がある？

こんなものを押し付けた男の気が知れない。

心の中で毒づきながら、小さな背中に語りかけた。

「吉田、もう帰ろう」

「いやよ！ どうしてそんなこと……」

言葉はそこでプツリと途切れた。

沈んでいた頭が持ち上がり、しゃがみこんでいた身体が立ち上がる。

「柳瀬……君？」

これまでとは明らかに違う声音を来た時、傘の柄を握る手が震え始めた。

俺は傘を差したまま動けないでいた。

青ざめた頬がみるみる薔薇色に変わっていき、悲しみに沈んだ瞳に生気が宿る。

その瞳から雨に交じって透明な涙がこぼれ落ちる様を、不安と期待の入り混じった思いで見つめ続けた。

「列車事故で亡くなったなんて、嘘だったんだよね？ 柳瀬君が死んだりするはずないよね？」

吉田はいきなり核心をついてきた。

否定するために口を開いたが、言葉は容易に出てこない。

灰色の空。

そば降る雨。

木立に囲まれた薄暗い朝の墓地。

びしょ濡れの吉田とこもり傘を差した俺。

どう考えても、ハッピーエンドにいたるシチュエーションじゃなさそうだ。

「柳瀬君、どうして何も言ってくれないの!？」

ぼんやりしていたのはうかつだった。

まっすぐ伸びてきた腕が、俺の身体を突き抜けた。

あまりの衝撃に吉田は声を出すことすらできず、「うわっ!」と、悲鳴をあげたのは俺の方だった。

胸から入り、背中から突き出た出た手は、今も虚空にとどまっている。

自分自身が引き起こしたシュールな光景に息を飲み、俺はあわてて後ずさった。

「しっかりしろ!」

吉田は焦点の合わない目で俺を見た。

「頼むから、気を失ったりはしないでくれ。今の俺はお前を支えることも、助けを呼ぶこともできないんだ」

情けないが、それが事実だ。

この状況で正気を保つことは、至難のわざだろう。

でも、こんな所で倒れられても、俺にはどうすることもできないのだ。

「何もしない。だから、明後日の朝まで、そばにいてはいけないか

「？」

「……………明後日の……………朝……………？」

言葉が返ってきてほっとした。

弱っているように見えても、さすがは吉田比奈だ。

「俺が列車に轢かれて死んだのは本当だ。一緒にいるのはいやだと思っけど……………」

「いやじゃないよ！」

まっすぐこちらを見つめたまま、吉田は声をはりあげた。

「いやじゃない。幽霊でもいいから戻ってきて欲しいって思ってた。風紀委員に立候補したのは柳瀬君との接点が欲しかったからなの。だから……………明後日の朝だなんて言わないで！」

「は……………ははっ、お前、何、言っただ？」

ひきつった笑いとともに、俺は真剣な瞳から目をそらした。

そんなことをしたら、吉田は絶対幸せになれない。

9・究極のスライトキス

あわただしく階段を駆け上がっていく少女の後を、髪から落ちたしずくの跡がぼつぼつと追いかけていく。

「濡れた髪はちゃんと乾かせ」

呆れて呟いた時、廊下の突き当たりの部屋のドアが勢いよく開いた。

「柳瀬君、柳瀬君、どこ？」

開けっ放しのドアから覗くと、吉田は真剣な顔で部屋の中を動き回りながら、逃げた猫でも探すかのように、俺の名を呼んでいた。

おいおい、机の下なんか見て、何、考えてんだ？

あまりに懸命なその姿は、笑うというより、泣けてくる。

「いるよ」と返事する代わりに、急いで傘を開いた。

部屋の中で傘を差すなんて、屈辱的なほど間抜けな行為だが、そんなことを気にいられる状況ではなさそうだ。

傘が頭上でぱつと開くと、ホノグラムのようには見えなはずの姿が見え、聞こえないはずの声まで聞こえるようになる。

吉田は目を輝かせ、飛びつかんばかりに手を伸ばしてきたが、こもり傘のご利益はここまでだった。

咄嗟に後ずさった俺を見て、少女はたちまち泣きそうな顔になった。気まずい沈黙が二人の間に落ちて、いたたまれなくなった俺は、おどけた調子でどうでもいいことを口にした。

「噂には聞いてたけど、吉田の家って本当にすごいよな。さっきのおばさんは住み込みのお手伝いさん？」

吉田は無言のまま、恥じ入るように目を伏せた。
空気がさらに重くなる。

焦った俺は、次から次へと言葉を重ね、自ら墓穴を掘り始めた。

「生まれる時に親が選べるといいのにな。別に金持ちでなくたって構わないけど、母親はちゃんと母親で、父親も揃っていて、そうしたら子供ってのは、きつと、まともに育つんだろっな」

「私、柳瀬君は、誰よりもまともだと思う」

「……………」

きつぱりと否定されて、ようやく自分が何を口にしたのかに気が付いた。

「俺はただ、一般論を言ったただけで……………」

そう口にした途端、羞恥のあまりめまいがした。

学校一の才女の前でこんな風に取り繕った所で無駄なことだ。

一瞬で余裕をなくした俺は、腰かけていた机から飛び降りた。

自分に母親しかいないことも、その母親が息子の存在など気にもとめていないことも、家を出て自活していることも、生活費に困って女の家に入り浸っていた時期があることも、同じ学校の生徒たちには、ずっとひた隠しにしてきた。

親からネグレクトされた可愛そうな子供のレッテルを貼られるよりは、素行の悪い生徒でいる方が百倍ましだ。

そしてその思いは、吉田比奈を意識し始めてから、ますます強くなった。

皆の羨望と憧れを一身に集める美少女が、自分に興味を持ってくれていることが嬉しくないわけがない。

その興味が好意へと変化して、それにつれ、無彩色だった世界が次第に美しく彩られ、自分を取り巻く世界そのものが生まれ変わっていくようだった。

けれども全てを知った時、その好意がどんな風に変化するかを考えると恐ろしくて、ずっと背を向けてきた。

ああ、現実残酷だ。

覚悟を決めたように、吉田が小さく息を吸い吸い込んだ。

「本当は知っていたの。休んだ分の授業のノートを渡そうと思って、先生に住所を教えて頂いたの。柳瀬君は木造の小さなアパートに一人で住んでいた。びっくりして、その理由がどうしても知りたくていけないとは思ったけど……」

たまらなくなつて、俺は乾いた笑い声を漏らした。

「興信所に頼んで調べてもらったとか？」

「ごめんなさい」

謝罪の言葉を口にしただけで、否定も肯定もしないまま、少女は深々と頭を下げた。

そうか、何もかもお見通しだったのか。

金持ちはやることが大胆だ。

笑い続けることが難しくなってきた、俺は唇をかみしめた。

「知っていて、知らないふりをしていたの」

濡れた髪の間から覗くうなじが雪のように白い。

俯いたまま小声でしゃべるものだから、声がずいぶんくぐもっている。

「本当は言いたかったの。私は柳瀬君のことを知っている。いつも

何となく寂しそうで、不良ぶっているくせに曲がったことが嫌いで、プライドが高くて、あまのじゃくで、本当はすごく優しく……。知っているからこそ、好きなんだって言いたかったけど、自分が好きな人が、自分を好きでいてくれる可能性なんて、ごくわずかじゃない？ 怖くて言えなかつたのよ。でも、こんなことになるのなら、さっさとふられてしまえば良かった。そしたらあの夜、私を家まで送ることも、命を落すこともなかったはずなのに」

俯いたまま両手で顔を覆い、堤防が一気に決壊するような勢いで、吉田はわっと泣き始めた。

その姿を半ば茫然と見下ろしながら、俺は口元に手をやった。

可能性？

可能性だった？

告白してくる男を片っ端からふりながら、こいつはそんなことを考えていたのか！？

そう言えば、風紀委員に立候補したのも、俺との接点が欲しかったからだって、言ってたっけ。

そんな下らぬ理由で……風紀委員に？

ついに我慢の限界がきて、俺はぶはつと嘔き出した。

怒りも、絶望も、屈辱も、吉田の涙に押し流されて跡形もない。

「お前、おもしろすぎ！」

げらげら笑っているうちに、吉田の涙が伝染してしまった。

「勉強だつて、何だつてできるくせに、どうしてそんなに不器用なんだ！？」

おかしくてたまらない。

本当に、俺たちは何て不器用だったんだ！

「もういいよ、ストーカー行為は思い切り笑わせてくれたことに免じて許してやる」
止まらぬ涙を拭いながら笑いかけると、吉田は恨めしそうにこちらをすくい見た。

「どうしてそうなるの？ 私、たった今、告白したつもりなんだけど、柳瀬君は私のこと、どう思っているの？」

可能性がどうか言っていたくせに……。
傘の柄をくるりと回して、苦笑した。

俺が好きだと言ったら、一体、どうするつもりなんだろう？

「そんなこと確認したって意味ないだろ？ 生きている者にとって大切なのは、過去よりも現在と未来だ」

「過去じゃないわ。私にとっては現在よ！」

「現在だって？」

くすりと笑って、吉田の頬の輪郭を指先でなぞった。
もちろん触れることはできない。
すぐ近くにいるのに、世界はこんなにも隔たっている。

「吉田、キスしようか？」

質問を無視して囁いた。

まるで現実味のない提案に、驚いたように持ち上げられた顔は、よく見れば、涙でぐちゃぐちゃだ。

「ごもり傘を差した幽霊と交わす究極のスライトキス。きっと死ぬまで忘れない」

慎重に距離を測りながら、ゆっくりと顔を近づけると、吉田は無言

で目を閉じた。

閉ざされたまぶたから、流れ続ける涙の意味はわからない。
スライトキスは触れるだけの軽いキス。
でも、触れることなどできないから、究極のスライトキスだ。

幸か不幸かこの上なく切ない時を、控えめなノックの音が遮断した。
「お嬢様、お客様です」
ノックに続いて聞こえてきた声に、吉田ははじかれたように立ち上がり、俺はあわてて傘を閉じた。

「私に？ どなたなの？」

「麻賀先生です。お嬢様が今日も学校を休まれたので、わざわざ様子を見に来て下さったそうですよ」

その名前を聞いて少なからず驚いた。
担任でもない体育教師がなぜここへ？

「昨日も駅から送って下さいましたし、本当に良い先生ですね」
ドアの向こうから響いてくるところか華やいだ声。
そうだった。

うちの学校の体育教師は生徒の父兄に、とりわけ母親に絶大な人気があるんだった。

「柳瀬君、お願い、一緒に来て」
懇願するような声だった。

我に返って振り返ると、吉田は深刻な面持ちできゅっと眉を寄せていた。

10・絶望という名の闇

「今日が終わってしまっ」

吉田は不安げに呟きながら、電気を消し、カーテンを開いた。窓に切り取られた黒く四角い空には、極端に明るい星だけが辛うじてパラパラと散らばっている。

和紙をちぎってけばだてたような雲の隙間から、昨日より心持ち痩せた月が見えたり隠れたりを繰り返して、明日の天気はどうなるのか見当もつかない。

「麻賀はお前のことが好きなんだな」

ベッドに腰掛けた吉田の頭が少しだけ動いた。それはうなずいているようでもあり、うなだれているようにも見えた。

あの日から吉田がずっと学校を休んでいたことを、俺は麻賀の言動で知った。

ほぼ毎日、制服姿でホームに現れていたくせに、家と駅と墓地とを行き来していただけだなんて、優等生にあるまじき行為だ。

体育教師も同じことを思ったようだ。

「気持ちわかるが、いつまでも落ち込んではいいけないよ。柳瀬の分もしっかり生きていなくてはね」

そんな意味のことを幾度となく口にしていた。

吉田の隣りに座っていた母親はその度に気遣わしげな視線を娘に送っていたが、吉田は一度として首を縦に振らなかった。

純和風の外観を持つ屋敷の中には、吉田の部屋を含めていくつか洋間がある。

豪華なシャンデリアが吊るされた応接室もその一つだ。

精緻な唐草模様の壁に背を預け、高級な紅茶の香りを嗅ぎながら、俺は麻賀の顔を見つめていた。

男らしい精悍な横顔は、ひきしまった身体や礼儀正しい物腰とあいまって、いかにもな好青年ぶりだ。

だが、その視線が吉田に投げかけられるたびに、漆黒の瞳の奥でかすかに明滅する色は、かつて学校の屋上でかいま見た狂気と執着とを思い起こさせた。

「通り道でもありますし、明日は車で迎えに来ましょう」という提案に、吉田の母親は手放しで同意したが、吉田は首を横に振った。

「一人で行けるわ」

「今日も昨日もそう言って家を出たじゃない。無理強いはしたくないけど、もう半月でしょ？ お父様は視察旅行で今週末までお戻りにならないし、あなたのことが心配なの」

母親の心底心配そうな顔を見て吉田は言いかけた言葉を飲み込み、少し気まずい沈黙の後、不承不承頷いた。

自室に戻った吉田は憂鬱そうだった。

「麻賀先生は優しいけど……」

呟く声が沈んでいる。

こうもり傘を差し、学習机に座りなおした俺は、続く言葉をうながすために、軽く身乗り出した。

「優しいけど、何？」

「何となく怖い」

「怖い？」

鸚鵡返しに聞き返すと、机に頬杖をついたまま上目遣いに俺を見て、こくりと頷いた。

「でも、特別なことがあったわけじゃないのよ。好かれているのかなとは思うけど、別に告白されたわけじゃないし……」

「教師が教え子に告白なんかしたら、まずいだろ？ で、どうして怖いわけ？」

「うーん、どうしてと言われても」

吉田は両方の指を組み合わせ、記憶をさぐるように視線をさまよわせた。

体育の授業中に視線を感じて振り向くと、いつも目が合ってしまった。重い荷物を運んでいると、背後からすつと取り上げ、運んでくれる。塾の帰りに街中でたびたび出会ってしまう。

「何だか監視されている感じ？」

「よく言う。自分だって俺を監視していたくせに」

「ひどいわ」

傘の柄をクルリと回して言うと、吉田は耳まで赤くなり、すねたように唇を尖らせた。

他の者には決して見せない子供っぽさを見せられて、胸が切なくなる。

俺にとっても、吉田は出会った当初から、やはり特別な存在だった。

抜群のプロポーション。

輝くような白い肌。

薄紅色に彩られたつややかな唇。

華やかな美貌を持つ正統派の美少女は、優秀な頭脳と育ちの良さも

あいまって、ほとんどの男たちにとって高値の花だ。彼女を目で追っている男なんて、珍しくもない。

麻賀もその一人だろう。

だが、明日の夜を無事に乗り切るまでは、用心するに超したことはない。

「麻賀が迎えに来る前に家を出て、授業が終わったらまっすぐ帰る。その後は一歩も家から出ないってのは、どう？」

「柳瀬君は？ 一緒にいてくれるんでしょう？」

吉田は椅子に腰掛けたまま、伸び上がるようにして視線を合わせてきた。

「明後日の朝まではそのつもり」

「その後は？」

「その質問には答えられない。そんなことよりさっさと寝る。俺は……えっと、ベランダでも……」

夜を明かすと言おうとした途端、「だめよ！」と思い切り却下され、危うく机からずり落ちそうになった。

「ひよっとして、一緒に寝て欲しいの？」

冗談っぽく告げると、吉田は小さく頷いて、まっすぐな瞳を向けてきた。

「どうしても諦めたくないの。会いたって願い続けていたら、本当に会えたんだもの。思いが強ければ、ずっと一緒にいられるって信じていたいの。ねえ、他の誰でもなく、私のそばにいてくれるんだから、私、うぬぼれてもいいのよね？」

「俺は……」

肉体がないわけだから、睡眠も不要だし、食欲も、性欲も皆無だ。

それでも、吉田に触れたいと思った。

これ以上、向き合っていれば、とんでもないことを言ってしまう
うで、咄嗟に傘を閉じていた。

「うぬぼれてもいいよ。俺はお前が大切なんだ。たとえもう会えな
くても、それもお前を守りたいんだ」

かすれた言葉は夜にとけ、茫然と佇む少女の瞳が絶望という名の闇
を映し出す。

自分のために流される涙はもう見たくない。

俺は逃げるように背を向けた。

11・教室で

「吉田さん、大丈夫？」

「比奈ちゃん、大丈夫」

「吉田、大丈夫なのか？」

すれ違ったたびに、誰もが次々と同じ言葉を口にする。

吉田が学校を休み続けたということとは、どうやら学校中に知れ渡っているらしい。

「心配かけてごめんね」

大丈夫とも、大丈夫じゃないとも言わずに力なく微笑む顔は、昨日より、一昨日より、さらにやつれて見える。

俺はとぼとぼと吉田の後をついて行きながら、数え切れないほどのため息をついた。

ベランダにいるなんて言ったのは失言だった。

吉田は眠ることなど忘れてしまったように、いつまでもベランダを見つめていた。

そんな彼女から離れることができず、一晩中、俺は机に座り込んでいた。

本当に辛くて長い夜だった。

何度も何度も傘を差そうとしては思いとどまった。

「忘れることは、人が生きていく上でとても大切なことなんだ」
そんな言葉がその度に脳裏をよぎったからだ。

いつ、どこで、耳にしたんだっけ？

ああ、そうだ。

俺が家を出る直前に、母親の若い愛人が口にした言葉だ。

「全ての悲しみを鮮明に記憶したままでは、人は誰も生きていけないからね。精神分析で言うところの防衛機制ってやつさ」

国立大学を出たくせに、社会に出た途端にドロップアウトした彼は、時折さらりとそんな難しい言葉を口にした。

「人はみんな死ぬんだよ。今から百年後、ここにいる人間は誰もいない。僕はね、生きるってことは、死ぬまでの暇つぶしだと思うんだ」

そんなものかとも思うけど、たとえ暇つぶしだろうと、もっと生きていたかった。

それは吉田だって同じはずだ。

「おはよう、比奈！」

また誰かが吉田に声をかけてきて、俺ははっと我に返った。

考えてみれば、感傷的になっている場合ではなかった。

今日の午後十時三十二分に、吉田に何が起こるのか。

考えられることと言えば、事故か犯罪に巻き込まれることぐらいだが、家の中にいれば、ある程度は安全だ。

吉田家の家人が娘を殺そうとするとは思えないし、あの屋敷のセキユリテイを考えれば、強盗が押し入る可能性も低い。

吉田が席についたのを確認し、窓の外を見た。

生徒が一人いなくなった所で、この場所は何も変わらない。

予鈴が鳴ると同時に、外にいた生徒たちが校舎に向かって一斉に駆け出した。

その向こうには、入学式の日には俺が乗り越えた越えたコンクリート

の塀が広がっている。

「あの塀を越えることは、もうないんだな」

石ころでも蹴りたい気分だが、それすらできない。

自嘲の笑みとともに自分の席を流し見た。

机の上に白い花が飾られている。

自分のことは、もうどうでもいいけど、実は一つだけ気になること
あった。

ホームで誰かに背中を突き飛ばされたのは間違いない。

つまりは殺人事件なのに、ただの事故死として処理されている。

夜だったけど、ホームにはかなりの人がいたはずだ。

目撃者はいなかったのだろうか？

それよりも何よりも、俺は誰にどういう理由で殺されたのか？

(図書館に新聞の閲覧コーナーがあったっけ)

新聞記事をチェックしてみるつもりで廊下に出た俺の身体を、クラ
スメイトがすり抜けた。

「おはようございます!」

弾んだ声に振り返ると麻賀雄介が立っていた。

しなやかな長身に黒いジャージをまとった若い体育教師は、女生徒
に向かって爽やかに微笑み、吉田の名を口にした。

「ちゃんと来ていますよ。呼んできましたよっか？」

「いや、来ているなら、いいんだ」

軽く手を振った麻賀は、教室の前をそのまま通過して、廊下をまっ

すぐ進んでいく。

俺は何だかぞつとして、急いで教室に駆け戻った。

時間は緩慢にそれでいて確実に流れていく。

その日の最後の授業は体育だった。

吉田は当然のように授業を休み、保健室で休んでいると嘘をついて、そのまま教室に留まった。

「……………柳瀬君」

誰もいない教室で、そつと名を呼ばれたが、俺は無視を決め込んだ。

「柳瀬君！」

「……………」

「五秒以内に現れてくれないと自殺するわよ！」

「は？」と聞き返す間もない。

仁王立ちしたまま、天井に向けて声を張り上げた少女は、カバンの中から果物ナイフを取り出して、自分の首筋に突きつけた。

五秒のカウントダウンが始まり、仰天した俺の手から閉じたままの傘が滑り落ちた。

「ば、馬鹿、や、やめろ！」

信じられない展開に、俺は瞬速で傘を拾い上げ、それをすばやく差しながら、負けないぐらいの大声を張り上げた。

教室中に死んだはずの人間の声が響き渡ったが、駆けつけてくる者は幸いにしていなかった。

体育は2クラス合同だから、隣のクラスは空っぽだ。

「一組は……………」

「科学の授業で教室移動」

廊下から身を乗り出すようにして、反対隣の教室を気にする俺に、吉田は不敵に笑ってみせた。

「ようやく姿を現したわね」

「何だ、そのセリフ？ 悪役を追い詰めた正義の味方じゃあるまいし……」

「だって、そばにいてくれるって言ったのに」

「だから、そばにいるじゃないか！」

信じられない思いで言い返すと、少女は俺の目を覗き込み、空いている方の手で傘を指差した。

「それ、ずっと差しているわけにはいかないの？」

「死んだ生徒が教室で傘を差していたら怖いだろ？」

「だったら、二人だけでいる時ぐらい……」

軽く振り上げられた手には今もナイフが握られている。

俺は悲鳴をあげそうになった。

「わかった、わかったから、ナイフをしまえ！ さてはお前、確信犯だな。初めから俺を脅すつもりで、そんなものを持って来たんだろ！」

「ごめんなさい」と謝る声が、心なしか嬉しそうだ。

全身冷や汗をかきながら、ただただ相手を凝視した。

生きてる時も、死んでからも、俺はこいつに振り回されっぱなしだ。

「ずっと気になっていたんだけど、それ、魔法の傘？」

「魔法」という言葉のあどけなさに、俺は思わず噴き出した。

「笑っていないで、教えてよ！」
「教えてと言われても」

教室の壁に背を預けて座り込み、ひそひそ話をしている俺たちは、はたから見るとかなり怪しい。

誰かに見つかったらどうしようと思は俺は気が気でなかったが、吉田はなぜか平然としている。

「黒田つてやつが貸してくれたんだ。だから俺にはこの傘のことは何もわからない」

素直にそう答えると、今度は黒田について聞きたがった。

まっすぐな瞳は単なる好奇心ではなく、何かを求める必死さを宿していて、胸苦しさを覚えずにはいられない。

「黒田……黒田圭吾。年は二十五。黒いスーツを着た長身の男前で、自称、迷える魂の案内人。俺は黒田にとって千人目にあたる最後のお客だそう。そう言えば、千人目に到達するまでに、六十年以上かかったようなことを言っていた」

魂の道案内……荒唐無稽とはまさにことごとだ。

だが、そんなわけのわからぬ話を、吉田は真剣な顔で聞いていた。

「六十年で千人。一年間で十七人弱。一ヶ月に一人か二人……」

「正確には六十五年だ」

ぶつぶつ独り言を言っている所に茶々を入れると、厳しい顔でならまれた。

「死んでからも仕事があったりするのかしら？ 最後のお客ってことは退職ってこと？ そう言えば、六十五年定年の会社も最近が増

えてきて……」

死んでからも仕事？

六十五歳定年？

その発想はどこからくるんだ？

「まあ、聞いとくよ。わかったら教えてやるから」

本気で言ったわけではなかったが、吉田は素直に呟いて、小さなあくびを一つした。

「どうしたのかしら？ ものすごく眠いの。頭に蜘蛛の巣がはったみたい」

「そりゃあ、何日も寝てないからだろ？ お前、目にクマできてるし」

「クマ？ 本当に？ でも、さっきまでは全然眠くなかったのよ。」

柳瀬君の姿を見てほっとしたからかしら？ いやだな。もっと話したいのに……」

呟く声がだんだんと小さくなり、吸い込まれるようにまぶたが閉じていく。

「お、おい！ こんな所で寝るのはまずくないか？」

うつすらと目を開けた吉田は、極上の微笑を浮かべてみせた。

「目が覚めるまで、絶対にいなくなったりしないでね」

すごく甘えた口調でそれだけ言って、壁にもたれたまま動かなくなつた。

まるで、電池切れのロボットみたいだ。

頬にかかる髪をはらってやりたくて、無意識に伸ばした指先を握りこんだ。

気が付くと日は少し斜めに傾いて、窓から差し込んだ陽の光が、主のいない机や椅子を黄色っぽいフィルターで包んでいた。

音楽室からかすかに流れてくる下手くそな吹奏樂が、ひどく慕わしいものに思えてくる。

俺は静かに傘を閉じ、寝息すらたてずに眠り続ける少女を見下ろした。

長いまつげが影を落とした寝顔は眠り姫のようだった。

「平和そのものの寝顔だな」

くすりと笑った途端に不安になった。

王子様のキスどころか、寄りかかる肩さえ持たぬ自分に、吉田を守ることが出来るのだろうか？

ふと見れば、教室の時計は午後二時半を指していた。

「あと……8時間……」

呟く声は誰にも届かない。

今日、何度目かのため息をついた時、教室のドアが音もなく開いた。

12・危険な男

開け放った窓から一陣の風が吹き込んで、白いカーテンを翻した。机に飾られた白菊が真つ白な花弁を床に散らし、後方の壁に貼られた掲示物がさざなみのように次々とまくれ上がっていく。

音楽室から漏れ聞こえていた不器用な演奏は、いつの間にか消えていた。

その変わりに聞こえてきたのは、ないはずの心臓が打つ胸の鼓動。ドアを開けて入ってきたのは、麻賀雄介だった。

「眠っていたのかい？」

麻賀は少女の前に膝をつき、恋人に語りかけるように囁いた。

男の節ばった指が少女の頬に触れ、ためらうことなくその身体を抱き上げる。

引力に逆らうことを知らぬ少女の髪が、窓からの光を反射して金色に輝いた。

静かな色彩に彩られた光景は白昼夢のようだ。

体育の授業はどうしたのだろうか？

膨れ上がる疑問と不安に耐え切れず、俺はこうもり傘を握り締めた。

「麻賀先生、どうなさったんですか？」

唐突にかけられた声に、廊下を歩いていた麻賀はごく自然に振り返る。

中年の国語教師に軽く会釈して、腕の中の少女を心配そうな面持ちで見下ろした。

「体育の授業を見学していた生徒が倒れてしまいました……」

「あら、二年二組の吉田さんじゃない！　ずっと学校を休んでいるって聞いていたけど……」

「クラスメイトが亡くなったことが、よほど、ショックだったみたいですね」

廊下を並んで歩きながら、国語教師は深く頷いた。

「ああ、柳瀬君ね。本当にきれいな子だったわよね。憧れていた子は多かったみたいで、私が担任しているクラスでも、大変だったのよ。あ、そう言えば、体育の授業は……」

「この子を保健室に運んだらすぐに戻ります。保険委員に任せても良かったのですが、私の方が、体力がありますから」

「先生は人気がありますから、そんな光景を見たら、女生徒たちが大騒ぎだわ」

教師たちのやりとりを、俺は複雑な思いで聞いていた。

授業をさぼって教室で居眠りしていた生徒をかばうためなのか、それとも他の理由があるのか、麻賀の嘘は鮮やかだった。

麻賀は吉田を保健室まで運び、そのままグラウンドに向かったが、日がすっかり傾いた頃、私服に着替えて戻ってきた。

吉田はずっと眠ったままで、ようやく目を覚ました頃には午後7時を回っていた。

「麻賀先生」

「目が覚めた？」

保健室のベッドで目を覚ました吉田は、はじかれたように上半身を起こしたが、男性教師に動きを阻まれ、そのままベッドに押し戻された。

「山瀬先生は？」

「もう遅いので帰って頂いたよ。目が覚めたら私が自宅まで送るところになってる」

養護教員がいないことを知り、吉田の顔が明らかにこわばった。

「一人で帰れます」

「それは困る。具合の悪い生徒を一人で帰らせたりしたら、後で叱られそうだし」

「具合なんか悪くありません」

きつぱりと告げられて、麻賀は困ったように苦笑した。

「そこまで言われては、どうしようもないな。じゃあ、君の家に連絡して、車で迎えに来てもらうということ、折り合いをつけようか」

「あ、私、自分で……」

麻賀がジャケットの胸ポケットから携帯電話を取り出したのを見て、吉田は声を張り上げたが、自分の携帯がここになんかいないことに気がついて、続く言葉を飲み込んだ。

教師が生徒の自宅の電話番号を、いちいち自分の携帯電話に登録しているというのは、おかしくないだろうか。

そんなことをぼんやりと考えながら、俺は吉田のそばに立っていた。そんなことなど知らぬ男は、携帯電話に語りかけながら、手際良く事を運んでいく。

「山瀬先生は紅茶フリークだね」

電話を終えた麻賀は、保健室の隅においてある棚からブルーの缶を取り出すと、慣れた手つきで紅茶を煎れ始めた。

「これを飲み終える頃には、多分、迎えが到着するよ」

さあどうぞ、と差し出されたカップから、ふわりと良い香りが漂っ

た。

その香りに誘われたように、いくぶん表情を和らげた吉田は、小さな声で礼を言い、両手でカップを受け取った。

俺はじりじりしながら迎えが来るのを待っていた。

時計の針は午後七時半をさしている。

つまりは、後、三時間しかない。

時計に向かって盛大に舌打ちした時、奇妙な破砕音が足元ではじけた。

はっとして見下ろした視界の中、リノリウムの床に四散した陶器の破片を、男物の靴がゆっくりと踏みしめる。

「君は本当に残酷だ」

地を這うような声だった。

教師の仮面をかなぐり捨てた麻賀雄介は、崩れるように前のめりになった少女の肩をわしづかみにした。

「なぜ、私を見てくれないんだ？　こんなにも君を愛しているのに責めるような、すぎるような囁きは、女生徒に人気のある爽やかな体育教師のものとは思えない。

「吉田にさわるな！」

まっすくな髪に指をからませ、すくい取った一筋に口づける男を殴りつけてやるつもりが、アップパーカーは空しく空を切っただけだった。

(冷静になれ)

辛うじて残っていた理性が、内側から語りかけてきた。

(こつもり傘があるじゃないか。傘を差せば姿は見える。声も聞こえる)

確かに姿は見える。

声も聞こえる。

でも、それだけだ！

(それでも吉田を助けたいんだろう？ もはや疑いようもない。今日の午後十時三十二分に吉田を殺すのはこの男だ)
心の声に促され、俺はよろよると立ち上がった。

麻賀は少女を抱きかかえ、長い廊下を歩いていく。

下校時間はとつくに過ぎているが、教師の中には残っている者がいるはずだ。

願いも空しく、麻賀は誰にも見咎められぬまま駐車場にたどり着き、銀色のボルボに乗り込んだ。

13・サービスエリア

幽霊になりたての俺には生きていた頃感覚が根強く残っていて、空を飛んだり、瞬間移動したり、ポルターガイストを起こしたり、そんなことは思いもよらないし、できもしない。

だが、実体がないことだけはいやというほど思い知らされているわけで、時速百二十キロで走る続ける車の屋根に佇立することぐらいは、わけもなかった。

平日の夜の高速道路は車の流れもスムーズで、麻賀が運転する高級車は西へ西へと進んでいく。

道路の左側には寶石箱をひっくり返したような夜景が広がり、近づいては去っていく様々な色の光跡が目まぶしい。

「どこへ行くつもりだろう？」
前方に目を凝らしつつ呟いた。

トンネルを抜けてしばらく行くと、サービスエリアの所在を告げる案内板が見えてきた。

車のスピードが次第に落ちていく。
ガソリンの残量計が限りなくゼロに近づいているから、給油が必要なのだ。

いずれにせよ、車がサービスエリアのガソリンスタンドに入った今が、助けを求める唯一無二のチャンスに違いない。
車の屋根から飛び降りた俺は、前方を歩いている人影に向かって駆け出した。

「あの……」
雨も降っていないのにこもり傘を差している俺を見て、女は咎めるように眉をひそめたが、礼儀正しく頭を下げると、すぐに表情を和らげた。

「その傘、どうしたの？ 雨は降っていないわよ」

「ちょっとわけがあつて、それより、お願いが……」
警察に連絡して欲しいと頼み込むと、当然のことながら理由を訊ねられた。

（ここからが勝負だ）

俺は小さく息を吸い込み、用意した嘘を口にした。

教師に妙な薬をもらえ、強引に車に連れ込まれた。

自分は意識を取り戻し、すきを見て逃げたけど、一緒につかまったクラスメイトが今もとらわれたままになっている。

二人の高校生を同時に誘拐。

しかもそのうちの一人は男子生徒というのだから、これはかなり苦しい嘘だ。

だが、幸いにして、相手は真剣な顔で話を聞いてくれている。

「あれです、あの車です」

シルバーのボルボをまっすぐ指差し、麻賀雄介の名前と学校名、吉田比奈の名前と電話番号、記憶した車のナンバーを告げてから、俺はもう一度、頭を下げた。

「お願いします。今すぐ警察に電話して下さい。吉田の家に確認してもらえば、俺が嘘についていないことが確認できるはずです」

「わ、わかったわ……。あ、待つて！どこへ行くの?!」
うるたえつつも携帯電話を取り出した女は、いきなり背を向けた俺に、あわてて声をかけてきた。

「車に戻ります」

「だめよ、何を考えているの!? あなた、名前は!?!」
叫んだ声は聞こえたが、振り返ることはしなかった。

給油を終えたボルボが今まさに走り出そうとしている。

闇に紛れてすばやく傘を閉じ、車の前方五メートルの位置で地面を蹴って跳躍した。

14・狂気

闇の向こうで鳥の音がする。

風が吹くたびにざわめく木々のシルエツトが、じっと目を凝らした視界の中でゆらゆらと揺れている。

森の中の別荘地と言えば聞こえは良いが、シーズンオフのこの時期、点在する建物の陰から漏れる明かりは皆無だった。

あの後、車が高速を降りて山の中に分け入ったのは、胸をかきむしりたいほどの誤算だった。

ずっと高速を走り続けていれば、今頃、吉田は帰宅できていたかも知れないのに。

麻賀はご丁寧にも、吉田のカバンを教室から回収してきていたが、カバンの中から響いていた携帯電話のバイブレーションが、別荘地に入ったあたりでピタリとやんだ。

電波が届かなくなったのだ。

助手席の吉田はこんこんと眠り続けている。

家族はさぞかし心配しているだろう。

警察も動き出しているはずだ。

「ここは私の父が所有する別荘でね……」

返事がないのを承知の上で、男は少女に語りかける。

その言葉は嘘ではないようで、麻賀がポケットの上着から取り出した鍵で、入口のドアはわけもなく開いた。

町なかとは明らかに違う圧倒的な闇の中、小さな懐中電灯を手にした男は、少女を肩に担いだまま、ドアの中へと身を滑らせた。

ほのかに漂う木の香り。

壁のスイッチを操作すると、吹き抜けの天井から吊り下げられた照明器具に明かりともる。

立派な暖炉を横目に見ながら奥へ進むとドアがあり、ドアを開けると寝室だった。

「愛しているよ」

制服姿の少女は、真っ白いシーツが敷かれたキングサイズのベッドに横たえられた。

俺はぞつとして身震いした。

映画やテレビドラマでおなじみの、甘さを含んだ告白を耳にして、これほどの恐怖を味わったのは始めてだ。

男の手が制服のリボンをシュツと音をたてて引き抜いた。

これから何が始まるのかは、想像するまでもなく明らかだ。

こいつは狂っている。

自分の教え子をさらい、山の中の別荘に連れ込んだ上、犯そうとしている。

「吉田から離れる！ エロ教師！」

怒りに震える声が、ベッドのきしみ音に重なった。

少女にのしかかっていた男が、背後からかけられた声に振り返り、張り裂けんばかりに目を見開いた。

「ゆ、許してくれ、許してくれ！ だが、わ、私は、彼女のために

……」

意味不明のことをわめき散らしながら、麻賀はベッドから転げ落ちた。

恐怖に引きつった面持ちで、じりじりと後ずさりする姿はまさしくホラー映画のワンシーンだ。

(かつての教え子の幽霊がそんなに怖いのか)
期待した通りの、いや、それ以上の相手の怯えっぷりに、俺は唇の端を持ち上げた。

それは、多分、ひどく自虐的な笑みになったはずだ。
その笑みさえも受け止めかねて、元教師は小さな悲鳴をあげ、壁に背中をこすり付けた。

「とり殺されたくなければ、そこから動くなよ」
冷めた思いで、男の足を指差し、吉田の方に向き直った。
スカーフは外され、衣服は少し乱れているが、心理的なダメージを受けるほどではなさそうだ。

「吉田、起きろ、目を覚ませ」
耳元で呼びかけると、かすかに身をよじらせた。
二度ほど名前を連呼した所で、ようやくうつすらと目を開けたが、焦点は全く合っていない。

「こいつに何を飲ませた？」
「た、ただの睡眠薬だ」

壁まで追い詰められ、全身に恐怖をまとった男の震える声に、ベッドのきしみ音が重なった。
すばやく振り返った俺は、思わず胸を撫で下ろした。
緩慢な動作で上半身を起こした吉田が、不思議そうな眼差しをこちらに向けている。

「オハヨ……じゃなくて、オソヨード」

下らないジョークを飛ばすと、吉田はとがめるように眉をひそめた。

「私、ずっと、眠っていたの？ ねえ、ここは……」

「説明は後。それより、時間が知りたいんだけど」

「時間？」と小さく呟いて、ぐるりと周囲を見回した吉田は、ベッドのそばに落ちていた自分のカバンを拾い上げ、携帯電話を取り出した。

「十時……二十分」

一瞬、絶句した後、「そうか」と応えた途端、握り締めた傘の柄がずんと重くなる。

まだ、危険が去ったわけでは、なかったのだ。

「麻賀、別荘の鍵を出せ」

俺は傲然と言い放ち、目の前の男をにらみつけた。

男がポケットから取り出したそれを、今度は宙に放れと指示を出す。カチャリという金属音とともに、二種類の鍵がついたキーホルダーが床に転がった。

一つはガレージの鍵だろう。

そしてもう一つは……。

「吉田、その鍵を持ってここから出る。外から鍵をかけて、じっとしてるんだ」

「ねえ、どついうことなの？ ここはどこ？ 何が起こったの？」

吉田はすぐには動かなかった。

カバンを両腕で抱えるようにして、ドアの所に立っている。

浮かんだ疑問を解決するまで、テコでも動かないつもりに違いない。内心の苛立ちを、ため息一つで抑え込み、俺は仕方なく口を開いた。

「ここは麻賀の別荘だ。お前は睡眠薬入りの紅茶で眠らされて、麻賀の車でここまで運ばれた。この近所には人は住んでいない。携帯もつながらない。これでわかっただろう？ とにかくここから早く出る！」

別荘の名義が麻賀の父親になっているのなら、警察がこの場所を割り出すのは、そう難しいことではないはずだ。

（午後十時三十二分さえ無事に乗り切れば……）

切羽詰った形相の俺を見て、吉田は鍵を拾い上げ、ドアに向かって駆け出した。

寝室のドアは内側からわけもなく開いた。

振り返った視線の先で、紺色のスカートが翻る。

驚くほどの敏捷さで、麻賀が動いたのはその時だった。

「行くな、行かないでくれ！ 愛している！ 愛してる！ 全ては君のためだったんだ！ 君があんなやつに惑わされて、私を受け入れようとしないから……」

自己中心的なセリフを当たり前のように口にする男なんか無視して、さっさとここから逃げるべきじゃないのか？

それなのに、吉田はこの上なく醜悪な愛の告白を、身じろぎもせず聞いていた。

「先生が柳瀬君を殺したんですか？」

そして自分が口を開く番になった途端、一気に論点を飛躍させた。こちらに背を向けたままなので、どんな顔をしているのかはわからない。

だが、これほど冷徹な吉田の声を、俺は聞いたことがない。

ホームで俺を突き飛ばしたのは麻賀雄介ではないか。俺だって、うすうすそう感じていた。

だが、口にするべき時は、今じゃないだろう？

「吉田、下らないこと言っていないで、外へ出る！」

「下らないことじゃない」

細い指の間をすり抜けて、床に落下した鍵の行方には目もくれず、吉田は逃げることを放棄して、静かに麻賀を顧みた。視線で人が殺せるなら、麻賀はこの瞬間に息の根を止められたに違いない。

「質問に答えて下さい」

もつとも最悪な方向に、事態が展開しつつある。

沸騰しかかった頭でそう悟った時、男が狂ったように笑い出した。

「アハハハハ、アハハハ、ハハ……何を今さら！ そんなの、わかりきったことじゃないか！ 君にだって見えるだろう？ あれが何よりの答えだ！」

極限まで追い詰められて、頭のネジがぶちきれたのか。

それとも、もともとおかしいのか。

哄笑をはじめながら、まっすぐこちらを指差す男を、俺は無言でにらみつけた。

「なあ、柳瀬、そうだろう？ 私を道連れにするために来たんだろう？ だが、吉田は渡さない。彼女は永遠に私のものだ」

出口に向かって伸ばされた吉田の腕を、麻賀はすばやくつかんでひねり上げた。

苦痛に満ちた叫びが少女の口からほとばしる。

その手を離れ、床に叩きつけられたカバンの中から、果物ナイフが転がり出たのに気がついて、俺は目の前が真っ暗になった。

15・運命のカウントダウン

「やめる！ やめるんだ！」

男に向かつて叫んだのか、圧倒的な体力差のある相手に押さえ込まれ、床の上にくずれながらもナイフをつかんだ少女に向かつて叫んだのか、自分でもわからない。

次の瞬間、「うわっ」という叫び声とともに、男は床にしゃがみ込んだ。

頬に押し当てた手のひらの間から、じわりと鮮血がにじみ出る。

「どうして人が殺せるの？ 人を傷つけることは、こんなにも辛いことなのに」

よろめき立ち上がった吉田の手からナイフが離れた。

絶妙のバランスで床に突き刺さるそれを視界の端におさめながら、俺は咄嗟に身をすべらせ、吉田をかばうようにして男と対峙した。

「柳瀬、お前がいけないんだ！」

頬から血をしたたらせながら絶叫する男の顔には、ありありと狂気が浮かんでいる。

「お前が列車にひき殺される一部始終を私はホームで見届けたはずなのに、お前さえいなければ、全てがうまくいったはずなのに、なぜ、お前はここにいる!？」

麻賀の家は裕福な資産家で、麻賀は箱根駅伝で走ったこともある優秀なアスリートで、学校では父兄からも生徒からも慕われて、それなのに、どうしてこんなにも歪んでいるのだろうか？

(俺はこんな男のために……)

差しっぱなしの傘がやけに重く感じられた。

だが、感傷に浸ってはられない。

俺は気を取り直し、いつも吉田がそうするように、相手の目をまっすぐ見つめた。

「ここにいるのは吉田を守りたいからだ。俺をホームから突き落とすように、お前は吉田を殺すかも知れない。自分のものにならないければ、足を引きちぎってでも思い通りにするかも知れない。そう思うと不安でたまらないんだ」

背後に佇む吉田が嗚咽をこらえるようにして泣いている。

遠くにパトカーのサイレン音を聞きながら、俺は祈るような気持ちで言葉を紡いだ。

「吉田はお前のものじゃない。もちろん、俺のものではない。吉田の全ては吉田のものだ。だからもう、自由にやってくれ」

すっと目を逸らした麻賀が、肩を竦めて苦笑した。

「俺は吉田を殺したりはしない。傷つけるつもりも、もちろんない」

俺は息を吐き出した。

パトカーのサイレン音がだんだんと近づいてくる。

あと少しでここに到着するに違いない。

(俺にできることは、もう何もない)

傘を閉じる前に別れの言葉を告げようと、背後の吉田に向き直った俺は、耳朶を打つ男の声にぎよっとした。

「だから、柳瀬、お前は安心して消えてくれ」

振り返った視界の中で、床に刺さった果物ナイフを男が無造作に引

き抜いた。
危険が去ったと思った瞬間にも、運命のカウントダウンは続いていたのだ。

16. それでも祈らずにはいられない

「吉田、俺から離れる！」

間に合わないことは承知の上で、それでも絶叫せずにはいられなかった。

両手でナイフの柄の握りこんだ男の顔は狂気に歪み、血走った目は何も見ていない。

生身の身体なら、吉田を突き飛ばすこともできただろう。

いや、それ以前に、自分に向けられた刃をそのまま受け止めることができたのだ。

だが、まっすぐ前方に向けられた凶刃は、俺の身体をそのまま素通りして、背後の吉田に突き刺さった。

背後を顧みた俺は、声にならない悲鳴をあげた。

「あ」という形に小さく開いた唇から鮮血があふれ、ほっそりとした身体がぐらりと前方に傾いでいく。

傘を投げ出し、夢中で手を差し伸べたけど、無駄だった。

まるで糸の切れた操り人形のように、吉田は床にくずれおちた。

「こ、こんなはずでは……」

真っ青になった麻賀の顔よりもはるかに青い顔を苦痛に歪め、浅い呼吸をせわしなく繰り返しながらも、少女はうつすらと目を開けた。

血に濡れた唇が声を発することはなく、それでもその動きがゆつくりと俺の名を刻んでいく。

苦しげに上下する制服姿の胸元には、深々と刺さったナイフが刺さったままだ。

「私じゃない、私じゃないぞ！ 柳瀬が悪いんだ！ お前のせいだ！」
俺は吉田のそばを一步も動いていないのに、麻賀は四方八方を睨みつけながら、俺を罵倒し続けている。

俺は泣きながら、傘を引き寄せた。
あふれる涙をこらえることは、もうできない。

「警察を呼んで来てくれ。もう、すぐそこまで来ているはずだ。応急手当をして、一番近い病院に運べば、吉田はきっと……」

気休めにすぎない言葉でも、口にせずにはいられなかった。
自分で警察を呼びに行くことも考えたが、俺はもう、吉田のそばを離れる気にはなれなかった。

麻賀は返事をしなかった。
いったん消えたまぼろしが再度現れたことがよほどショックだったのか、それとも警察が恐ろしいのか、強張った表情でじっとこちらを見つめたまま、呆けたように突っ立っている。

「さっさと行け！ 吉田が死んだら、必ずお前をのろい殺してやる！」
激情に駆られた怒声にびくりと震えた男は、逃げるように表に走り出した。

実際に麻賀が警察を連れてくる可能性など、ほとんど皆無だということにはわかっていた。
そして、吉田が助かる可能性も。

「吉田、死なないでくれ」
それでも祈らずにはいられない。
俺は絶叫して、床にぬかすいた。

17・シナリオなんてない

自らの血の海に横たわる少女の顔に、もはや苦悶の色はない。せわしなかった呼吸が、だんだんと間遠になっていく。

うつすらと開いた唇は、もう俺の名を呼ばない。硬く閉ざされた目は、もう俺を見ない。

「……黒田……」

それまで完全に忘れていた男の名が、ごく自然に口をついて出た。

「教えてくれ、俺が吉田の前に現れなければ、こんなことにはならなかったのか？」

俺がしたことは、全てシナリオ通りだったのか？」

「いいえ、そうじゃありません」

答える声は、すぐ近くから聞こえてきた。

いつからそこにいたのだろうか？」

顔を上げると、見慣れた長身が目の前に立っていた。

一つに束ねた黒い髪。

黒いスーツ、黒い細身のネクタイ、黒い皮靴、黒い眼帯。

初めて会った時と少しも変わらぬ姿だが、片方だけの目が今は悲しげに伏せられている。

「シナリオなんてものはないんです。避けることのできない死だけがそこにある。ただ、私の経験から推測させて頂きますと、一番、可能性の高い展開は……」

黒田はそこで言葉を切り、少しの逡巡を見せた後、遠慮気味に口を開いた。

「あの人……麻賀雄介でしたっけ？ 吉田比奈さんは、麻賀に別荘に連れ込まれ、抵抗した拳句に殺される。あの人、ちよつと異常みたいですから、死んだ後で乱暴されて、警察が踏み込んだ時には、ものすごく悲惨なことに……」

「もういい！」

俺は血に濡れた床にうずくまり、吉田の頬に手を伸ばした。

触れることができない。

だから、その身体が温かいのか、冷たいのかもわからない。

「吉田……生きているよな」

「ええ、まあ……」

力なくつぶやくと、曖昧に頷いた黒田は吉田の顔をちらりと見て、胸ポケットから懐中時計を取り出した。

「あと二分と十五秒、十四秒、十三秒……」

「ま、待て！ 待てよ！」

いきなり始まったカウントダウン。

まさか、ゼロになるまで続けるつもりか！？

俺ははじかれたように立ち上がり、黒田の肩をわしづかみにした。

「頼む、お願いだ！ 吉田を助けてくれ！ 何でもする！ 地獄に落とされても、ゴキブリに生まれ変わってもいい！ 俺はもうどうなったってかまわないから、こいつだけは……」

眉間にシワを刻み込んだ黒田は、暗い表情で時計の文字盤を見つめている。

「そう言われても困ります。わかっていらつしやるとは思いますが、私は迷える魂の案内人に過ぎません。人の生き死にに関することは、管轄外でも申しましょうか……」

言葉だけでなく、本当に困っていることは、その顔を見れば明らかだ。

「わかってはいる！ でも、それでも吉田を助けたいんだ！」

懐中時計を手の中に握りこみ、黒田はそつとため息をついた。

「ああ、あなたを見てると……」

続く言葉を飲み込んで、苦しげに目を閉じた。

18・ふさわしい場所へ

懐中時計が刻む音だけが規則正しく耳に響く。

黒田は悲しんでいるのか、怒っているのか、つかめないような顔をして、じつと何かを考え込んでいたが、再び目を開けた時には、すっかり事務的な口調になっていた。

「残念ながら時間切れです。それではあなたの迷える魂を、あなたにふさわしい場所にお送りしましょう」

いきなり話題を変えられて、「は？」と身を乗り出した途端、身体が床に沈みこんだ。

「あ、そうそう、お貸しした傘は返して頂きますね」

追いかけるように聞こえてきた声は、水の中から聞く音のように、妙なエコーがかかっている。

「え？」と聞き返した時には、周囲は闇に包まれていた。別荘地の夜も暗かったが、そんなもんじゃない。

正真正銘の真つ暗闇。

何も見えないのに、果てしなく落ちていく感覚だけがリアルで、胃が口からせり出してきそうだ。

頭が痛い。

めまいがする。

気分が悪い。

(息が……息が、できないっ！)

天国への道程でこんなにひどい目にあうわけがないから、これはもう真つ逆さまに地獄へ落ちているに違いない。

苦しみは永遠に続くかと思われたが、実際はその逆だった。

闇に落ち込んでから一分もしないうちに、俺は完全な闇から別の闇へとはじき飛ばされた。

ホームを照らす青白い照明。

コンクリートを叩く硬い靴音。

列車の通過を告げるアナウンス。

ホームに立っていた人たちが一斉に同じ方向に視線を動かし、そして……。

耳をつんざくブレーキ音。

こちらに向かってくる金属の固まり。

(……………あ……………)

気付いた時は、遅かった。

NGを出した役者が、同じ場面を繰り返して演じさせられるように、俺はまた背後から突き飛ばされていた。

前方に倒れ込みながら、辛うじて首だけひねって、強引に後ろを振り返った。

初回より冷静でいられたのは、生への執着をとっくに断ち切ってしまったからだろう。

俺の意識は、全く別のところにあった。

ホームに立つ男が冷やかな眼差しをこちらに向けている。

それを確認した刹那、車輪のきしみ音とともに静電気が闇にはじけた。

全てを飲み込む圧倒的な衝撃。

複数の悲鳴。

麻賀雄介の悪魔的な微笑だけを目に焼き付けて、俺は意識を手放した。

19・約束

「……………柳瀬さん……………」

低いのによく通る声が俺の名を呼んだ。

それがあんまり自然な感じだったから、俺もごく普通に相手に話しかけていた。

「ここ……………どこ？」

「産業奨励館です」

「さんぎょーしょーれーかん？」

「原爆ドームと申し上げればわかりますか？」

原爆ドーム？

前方に目を凝らしてみたが、暗い空が広がっているだけで、見慣れた廃墟の姿はどこにも見えない。

それもそのはず、俺と黒田は産業奨励館の屋根のなれの果て、むき出しの鉄骨部分に二人並んで腰かけていた。

夜だということは確かだが、時間まではわからない。

ライトアップされたコンクリートの塊とそこから始まる一体は、聖なる静けさの中に沈み込んでいる。

「とても立派な建物だったのですよ。チェコの有名な建築家が設計したとかで、緑の丸屋根は広島のスィンボリックな存在でした。もちろん今だって、広島のスィンボルであることに、変わりはありませんが……………」

自分で自分の言葉に傷ついたように、黒田は苦笑し、肩をすくめ、そしてそのまま黙り込んでしまった。辛抱強く待ったけど、続く言葉はなかなか出てこない。

「見たの？」

「ええ、十二歳の時に一度だけ」

返って言葉は滑らかだった。

俺はそのことにホツとして、続く言葉を促すように身を乗り出した。

「私の話を聞いて下さるのですか？」

「聞くよ。聞かせてくれよ。今度はそっちが話をする番だ」

初めて会った時の黒田の言葉を、俺は今も覚えている。

<この世の中はギブ・アンド・テイク。そしてあなたは私よりも年下。私のものを訊ねる前に、まずはあなた自身について教えて頂かなくては>

黒田は約束を果たすためにここにいる。

何となく、そんな気がした。

「私の話を聞いて下さるのですか」なんて、とぼけたことを言いながら、きつと始めからそのつもりなのだ。

「でも、その前に一つだけ教えてくれないか。あの後、吉田は……」

「会えますよ」

「会える？」

「ええ」

言葉の意味を問いただしたい衝動に駆られたが、俺は無言でうなず

いた。

黒田は決して嘘をつかない。

黒田が会えると言え、俺は必ず吉田に会える。

それがどんな形であつたとしても、今はただ、それだけでいい。

20・追憶

大正十年五月十七日。

それが黒田圭吾の生まれた日だという。

西曆に直せば1921年。

八十年近くも昔のことだ。

「生まれた頃の日本がどうだったかなんて、私だって知りませんよ」
大正時代のことはあっさりとしるして、黒田の話はいきなり昭和から始まった。

「生まれ育った村は吉和村と言いましたね。両親を早くに亡くした私は親戚筋を転々と……まあ、わかりやすく申し上げれば、やっぱりものごとく潰しだったわけですよ……」

「全然わかりやすすくないんだけど」
いきなり話の腰を折られ、黒田は嫌そうにこちらを流し見た。

「ゴクツブシって何？」
真顔でそう訊ねた途端、今度は世界の終わりのような顔をして、「はあ」と大げさにため息をついた。

「わからない言葉は、後できちんと調べておいて下さい」
「辞書もないのに、どうやって調べるんだ？」

英語教師のようなセリフをサラリと口にした青年は、できの悪い生徒の呟きを完全にスルーして、話を先に進めてしまった。

「取り柄と言えば勉強ができることぐらい。そんなものは貧しい山村では何の役にも立たないわけですが、私のことを気にかけて下さった先生の口ききで、幸運にも学問の道が開けたのです」

（学問の道？ 一体、どんな道なんだよ？）

心の中のつつこみが聞こえたようで、黒田はばつが悪そうに、「コホンと軽く咳払いをした。

「おかしいと思われるかも知れませんが、旧制高等学校に進学した人間は、当時、学歴貴族なんてもてはやされましてね。身寄りのない少年だって、いくらでも出世できたんです」

「へえ？ つまりは出世したかったってこと？」

「いえ……ええ、まあ……」

黒田は急に口ごもり、「色々と事情があるのですよ」と逃げを打った。

その歯切れの悪さに怪訝なものを感じながらも、俺はそれ以上、追求しなかった。

昭和七年。

十二歳の黒田圭吾は、小学校の校長に付き添われ、東京行きの特急列車に乗るために、生まれて初めて広島街に足を踏み入れた。

産業奨励館のある猿楽町は大小の商家が軒を並べる繁華街。時間合わせのために奨励館の南に広がる洋風庭園を散策し、噴水にかかる小さな虹を眺めた後、市内電車で広島駅に向かった。

21・昔の日本と日本人

「書生って何？ もちろん聞いたことぐらいはあるけどさ」

「ああ、もう、死語になっちゃったのですね」

しんみりとそう言っただけで、黒田も今度は呆れたりしなかった。

「他人の家に寄宿して、家賃代わりに家事や雑用を手伝いながら、学問を続ける若者と言えば、わかりますか？」

「ただで間借りさせてくれるってこと？」

「ええ、そうです。貧富の差が激しい時代でしたから」

「今だってそうさ」

冷めた言葉とともに、両足を鉄骨にひっかけたまま、上半身を後ろに倒した。

まばらな星空が目飛び込んでくる。

地方都市とは言え、街の夜空はぼんやりと灰色ががっていた。

昔の日本人は志を持つ若い人には寛大だったと黒田は言ったけど、ずば抜けて優秀な若い人には寛大だったと言い換えるべきだ。

自分が面倒を見ている書生が立身出世すれば、様々なメリットが生じることも視野に入れての慈善行為だったに違いない。

得することでもない限り、人はそう簡単に動いたりはしないのだ。

「屋敷には私も含めて四人の書生がおりました。だんな様は大変お忙しい方で、滅多に戻って来られませんでしたから、男手があった方が安心だと思われたのでしょうか」

正妻と、妾腹の娘と、大勢の使用人と、地方出の書生たち。

黒田が描き出す昔の日本は、俺の知る日本とは全く別物だ。異質な人間が作り上げる日常はどんなものなのか、普通の家庭さえ知らない俺には見当もつかないが、その屋敷の一人娘　百合という名の少女が、黒田にとって特別な存在だったということだけは、すぐにわかった。

どんなに平静を装っていても、思いは隠せない。

「百合さん」とその名を口にする度に、青年がまとう気のようなものが、ゆらゆらと切なく揺れる。

「ロリコン」

「ち、違います!」

大正生まれのくせに、黒田は現代のことにも通じている。ぼそりと呟いた途端、機関銃のような勢いで反論し始めた。

「確かに始めてお会いした時、百合さんは八歳でしたけど、私だって十二歳だったんですから、ロリータ・コンプレックスの定義には当てはまりません。それに私は、そういういやらしい目であの方を見たことなど……」

「全くないわけ?　本当の本当に?　一度も?」

意地悪く訊ねると、黒田はウツと言葉に詰まり、恥ずかしそうに俯いた。

「少なくとも、一校に入る頃までは……」

俺は思わず嘔き出した。

暗くてわからないけど、目の前の男は、真っ赤になっているに違いない。

「はっ、はは！ まじかよ！？ いまどき小学生だって、そんなに純情じゃないぞ！」

「私、いまどきの人じゃありませんから」

弱々しい抗議の声を無視して、思う存分、腹を抱えて笑った後、俺はにこやかに相手に向き直った。

「ところで、イチコーって？」

黒田はガクリと脱力し、わけのわからないことで、そんなに笑える人の気が知れないと嘆いたが、一校、すなわち旧制第一高等学校は、当時の最高学府である帝国大学入学者のための教育機関だと教えてくれた。

「一校を卒業しさえすれば、無試験で帝大に進学できるシステムだったので、皆、必死で勉強したものです」

「へえ、あんたも？」

「いちおう年上なんですから、名字に『さん』を付けて呼んで頂けませんか？」

非難するような眼差しに、「いやだ」という思いを込めて渋面で応えた。

年をとっているからって、必ずしも偉いわげじゃない。現に俺が知っている大人は下らないやつばかりだ。

にらみ合っていることに疲れたのか、黒田はトホホと言わんばかりにため息をついて、長い前髪をかきあげた。

俺の右側に座っているせいで、眼帯は見えない。

何もかも黒尽くめで、そのまま闇に溶け込んでしまいそうなのに、

彫像のような横顔だけが、くつきりと白く浮かび上がって見える。

遮るものがない横顔は、目を見張るほど端正だった。

俺のような女顔でもなければ、麻賀のような男っぽい顔でもない。切れ長の目が印象的な涼やかな美貌には、スーツよりも着物の方が似合いそうだ。

「……右目……どうしたの？」

それは、ずっと気になっていたことだった。

「銃剣で突いたのです。あ、銃剣ってわかります？ その名の通り、小銃に装着する剣のことですが……」

適当にはぐらかされると思ったが、黒田はゆっくりと眼帯を外し、変形したまぶたに走る引きつった傷跡をこちらに向けた。

古いものではあったが、見ている方が痛みを感じるほどの、ひどい傷だった。

「誰かに付けられたものじゃない。自分自身でやったんです」
表情をなくした俺を見て、黒田は申し訳なさそうに微笑んだ。

確認するように指先で傷跡をなぞってから、再び眼帯を付ける男の横顔を、俺は食い入るように見つめ続けた。

「あなたの考えている通りです。年をとっているからって、必ずしも偉いわけじゃない。戦場から逃げ出すために自分で自分を傷つけた私は卑怯者です。でも、私は生きたかった。どんなことをしても、生きて日本に帰りたいかった」

「日本史の授業は好きですか？」と訊ねられて、即座に首を横に振った。

「年号ばかり覚えさせられる授業は好きじゃない。でも、あんたの

話はそうじゃないんだろう?」

懐中時計の文字盤を確認した黒田は、時計を胸ポケットに戻しながら、「はい」と答えた。

「でも、時間がないんじゃないかなかったっけ?」

「あの時はそうでした。でも、今は大丈夫。目覚めるまでには、まだ間がありますから」

「目覚めるって、何が?」

何も答えず、黒田は意味深に微笑んだ。

23・岐路

好きな人ができた。

学校を卒業し社会人になった。

結婚して、子供が生まれて、子供が成長して、そして、自分は年老いて……。

人生なんてものは、当人にとってはこの上なく大切で、第三者から見れば大した意味を持たない日々の繰り返しだ。

その延長線上にどんな不幸が待ち受けているかなんて、その時になつてみなければ、わからない。

ましてや、はるか遠い所で始まった戦いが、自分から全てを奪ってしまうなんて、一体、誰が思うだろう。

「今さら、ごまかしたって仕方ありませんよね。そうです。私は百合さんのことが好きでした」

その後、黒田が思い出したように、「ロリータ・コンプレックス」というのは断固として否定しますけど」と付け加えたことがおかしくて、俺は唇を歪ませた。

つかみどころのない男だから、真面目なのか、おどけているのかさえ、わからない。

でも、どんな風に語ってみせたところで、悲劇が喜劇に変わることはない。

黒田が上京する前の年、日本は侵略戦争を開始した。

自国が権益を有する南満州鉄道の線路を、自ら爆破した上で、それを中国側の破壊工作と決め付けて、中国東北部、つまりは当時の満州を占領したのだ。

それから六年後の昭和十二年。

北京郊外の盧溝橋付近で夜間演習をしていた日本軍が、中国側の陣地から数発の実弾射撃を受けたことが発端となって、日中戦争が始まった。

だが、海の方こうで始まった戦争は、漠然とした不安をかきたてはしたものの、まだまだ遠い世界での出来事だった。

それよりも、日々の細々としたことの方が、はるかに大事なことのように思えた。

「理数が好きだったので、技師になりたいと思っていました。でも、どんな様が有力な政治家とのつながりを求めておいでだったので……」

志望先を工学部から法学部に切り替えた。

別段強要されたわけではなかったが、幼い頃から他人の顔色ばかり見て育ってきたせいも、第三者の意向を優先させるくせがついていた。

その選択が自分の人生において決定的な意味を持つことなど知るよしもなく、黒田は猛勉強の末、一校の法学部に合格することができた。

入寮の前日、百合はまた熱を出した。

心配で、締め切った襖の外に佇んでいた黒田は、中から「黒田さんと」呼びかけられ、ためらいがちに襖を開けた。

寝ていると思ったのに、百合は座敷の真ん中に座っていた。

ゆるやかなウェーブのある髪に水色のリボンを結び、同色のセーラーカラーのワンピース姿で正座している姿は、腕の良い人形師の手によって作られた高価な人形のようにだった。

「いつも思うんですけど、どうして私だっ
てわかるんですか？」

「どうしてだと思えます？」

少しどきまぎして訊ねると、熱で潤んだ瞳を微笑ませて、少女は悪戯っぽく小首を傾げた。

「ひょっとして、汗臭いとか」

急に心配になって、服に鼻を押し当てると、少女はクスクス笑い出
した。

24・あなたのためにできること

「そんなんじゃないやありません」

「じゃあ、特殊な能力でも……」

「あるはずないでしょう？ わかるのは黒田さんだけなんですから」

少女はつんとそっぽを向いた。

本気で怒っているわけではなく、単なるフリだ。

白い頬がほのかに薔薇色に染まっている。

それが熱のせいだけではないことを、そのことをたちまち見抜いてしまう自分を、喜ぶべきか、悲しむべきか……。

「私たちは、長く一緒にいすぎたのかも知れませんがね」

思いのほかしんみりした口調になって、我ながらあわててしまった。

目の前の少女より、自分の方がはるかに大人のはずなのに、やがてくる別れの時を意識し始めてから、別れの時を意識するほど互いの心が寄り添ってしまったことに気付いてから、百合を子ども扱いすることが、だんだんと難しくなっている。

「本当のことを申し上げますと、私にもわかります。声が聞こえなくても、姿が見えなくても、多分、百合さんが……そうですね、五メートル、いえ、十メートル圏内にいらっしやれば……」

はじめられたように顔を上げた少女とまともに視線がぶつかって、あわてて言葉を飲み込んだ。

(何を言おうとしていたのだろうか?)

百合には親同士が決めた許婚がいる。

年は一回りも上だが、家柄の良い帝国大学出のエリートだ。きっと百合を幸せにしてくれる。

つまりは自分の出る幕など……。

心の中で自嘲して、不自然にならないように視線を逸らした。

「ひよつとすると、五十メートルでも、百メートルでもわかるかも。六年も百合さんのお守りをさせて頂きましたから、我が子も同然と申しましようか……」

その瞬間、パンツと乾いた音が頬ではじけた。

頬を張られたのは、吉和村にいた頃、以来だった。

痛みはそれほど感じなかった。

ただ、それまで辛うじて保っていたはずの付け焼刃の分別が、その衝撃で消し飛んでしまった。

「今の言葉は本気でおっしゃったのですか」

「い……いえ……」

「私はそんなに子供ですか？」

「……………」

もう、言葉は出なかった。

嘘やごまかしを許さぬ、吸い込まれそうにきれいな瞳が、じっとこちらを見つめている。

張りつめた空気。

気まずい沈黙。

気持ちがぐらぐらと揺れている。

使用人でさえ滅多に訪れることのない、広い屋敷の奥まった一室で、こんな風に必死の瞳を向けられたら、どんなに強固に積み上げた理性だって、あっけなく崩れ落ちてしまいうに違いない。

26・傷つけたいわけじゃない

「子供かと問われれば、子供だとお答えするしかありませんが……」
そう口にした途端、痛みをこらえるように眉を寄せた少女の顔を見て、急いでその場に膝をついた。

「で、でも！ 我が子だなんて申し上げたのは暴言でした。どう考えたって十八歳の私に十四歳の子供がいるというのは、お、おかしいですよね？」

少女は無言のままだった。

ほんの少しでもいいから、笑って欲しい。

心の底から願ったが、辛抱強く待ってみても、そんな気配は全く皆無だった。

さっきはせつかく笑顔を見せてくれたのに……。

傷つけたいわけじゃない。

少女の幸せを少しでも曇らせることのないように、それだけを考え続けているだけなのに。

自分で自分を殴りたい気分だ。

一校合格が決まって以来、百合はずっとふさぎこんでいた。

使用人に引きずられるようにして習い事に行く以外は、ずっと部屋にこもりきりだった。

そして自分は、明日にはここを出て行かなければならない。

ひとたび屋敷を離れてしまえば、顔を見たい、話がしたいと思っても、ノコノコ会いに来ることは許されない。

互いが互いをどう思っているか、百合は許婚のいる良家の令嬢で、自分にはしがない書生に過ぎないのだ。

「どうしたら機嫌をなおして下さるのですか？　あなたがそんな顔をなさっていると、私は本当に困ってしまいます」
情けないのは承知の上で訴えると、心の動きを映すかのように、長いまつげがかすかに震えた。

「では……わがままを申し上げてもよろしいですか？」
ようやく耳にすることのできた声は、消え入るような小さな呟きだった。

でも、百合の言葉なら、一言一句聞き漏らすことはない。

「もちろんです」

心の中で胸を撫で下ろしながら笑顔でうなずくと、ワンピース姿の美少女はすつと両手を伸ばしてきた。

「さらって下さい」

「は？」

「私をここからさらって下さい」

「……………」

呆然と相手を見つめたまま、金縛りにあったように動けなくなった。いつからこんな表情をするようになったのだろう。

人形のように美しい容姿はそのままなのに、自分の知っている百合ではない気がした。

「十四歳の子供を相手に発情するなんて、やっぱり、ロリコンじゃないか」

そう指摘した途端、黒田は大げさに仰け反った。

「は、発情！？ ど、どうしてそうなるんです？ しつこいようですが、当時の私は十八歳……正確には十七歳と十一ヶ月で……」

「ね、ちよっと聞いていい？」

ひよいと右手を上げると、黒田は青ざめながらも、「どうぞ」「と言った。

「十八で高校に入学するなんて、おかしくない？」

「全然、おかしくありません。今とは学校制度が違うのですよ。詳しく説明するとややこしいので、一番シンプルなパターンで申し上げます、小学校は六年制と同じですけど、中学校が五年間ありまして、高校が三年、大学が四年、医学部や薬学部の場合はさらに二年……」

「何だ、それ？ 今より二年も長いじゃないか！」

思い切り顔をしかめると、黒田は肩をすくめてみせた。

「ええ、まあ……でも、大学に進む人なんて、ほんの一握りどころか、一つまみぐらいですし、長いと言っても、飛び級とか、繰上げ卒業とか色々あります……」

「で、百合さんと、かけおちでもしたの？」

じろりとこちらを流し見た黒田は、はあっと派手なため息をついた。

「全くいまどきの人は、どうしてそうコロコロと話題を変えるんですかね。会話というものは言葉のキャッチボールなんです。もう少し相手に対する気配りを……」

「まあまあ、今度から気をつけるからさ。それより……」

笑顔で先を促した俺だが、続く展開は半ば予想した通りだった。

26・野心

黒田には、世話になっている主家の娘をさらうことなど、できなかつた。

でも、百合はどうしても聞き入れない。

結局、二人して屋敷を抜け出して、ただ街を歩き回った。

「道行く人がこっちを見るんですよ。どこから見ても良家のお嬢様にしか見えない百合さんと、袖の擦り切れた学生服を着た私とが並んで道を歩くというのは、どう見てもおかしいわけでした……」

いたたまれなくなつて俯く長身の少年と、ほっそりとした可憐な少女の姿が目には浮かんだ。

その頭上に広がる空は、少女のワンピースと同じ色。

四月の初めというから、桜の花だつて咲いていたかも知れない。

それは、黒田が思っているようなものじゃなく、すれ違う人が思わず目を奪われてしまうほど、きれいな光景のような気がした。

「どうしてそこまで自分を過小評価するわけ？ あんた、性格は思いつきり三枚目だけど、ルックスはかなり上等な分類に入ると思っけど？」

「それって、ひょっとして、ほめているつもりですか？」

「もちろん」

真顔で頷くと、黒田は難しい顔をしてこめかみに手を当てた。

「あなたのおっしゃりたいことはわかります。私だって、百合さんを本当に連れ去っていたら、どうなっていたらだろって、考えることがあるんです。もちろん、あの時だけでなく、選択を迫られた人生の岐路はいくつもある。でも、私の人生も、百合さんの人生も、

どこでどうやり直しても、どうにもうまくいかない感じなんですよ」

黒田は頼杖をつきながら、「時代つてものですかね」と妙な感慨を口にした。

諦めているような、諦めきれないような、そんな感じの声だった。

百合に、自分をさらって欲しいと請われた日。

黒田は人目を避けるようにして街を歩きながら、少女の体調のことばかり考えていた。

幸い熱は上がらなかったけど、ゆるぎない真実が一つある。

温室育ちの花は、温室の外では生きられない。

身体の弱い百合に、苦勞などさせられない。

「そろそろ、帰りましょうか」

名も知らぬ小さな公園の前まで来た所で、黒田は足を止めた。

こちらを見上げる百合の瞳は涙で濡れていた。

無言で手を差し出すと、そっと手を重ねてきた。

自分たちのささやかな逃避行が、あっけなく終わってしまったことを、理解している瞳の色だった。

「私は中古城様のもとに嫁ぐのはいやです」

寄り添うようにして歩きながら、百合がぼつりと呟いた。

お嬢様のわがままはもう慣れっこだから、黒田は心の中で苦笑した。

「お会いしたことがないのだから、いやかどうかはわからないのでありませんか？ 実際にお会いすれば、お気持ちも変わるでしょう。何と言っても先方は帝国大学を出たエリートで……」

「どうしてそんなことを、おっしゃるの?! 帝国大学を出た方がエリートなら、黒田さんだって、そうだわ! 一校の法学部を卒業した後は、帝国大学の法学部に進学なさるのでしょうか?」

思わず足を止め、少女の顔を凝視した。

強い意志を秘めた瞳がまっすぐこちらを見返してくる。

百メートルを一気に駆け抜けたかのように心臓が激しく鼓動を打ち始めた。

(私をここからさらって下さい)

百合は本気でそう言ったのだ。

(一校から帝国大学に進み、政治家になることができれば……)

小さな手を握る手に無意識に力がこもる。

それは、生まれて初めて芽生えた野心だった。

27・人間のエゴ

「で、政治家には、なれたわけ？」

「なっていたら、こんな所にはいませんよ」

それもそうだと同意すると、黒田は悲しそうに微笑んだ。

「何があったの？」

「戦争です」

何気ない調子で訊ねた俺は、男が発した生々しい言葉の感触に、ごくりとつばを飲み込んだ。

戦争と言えば、日本史や世界史の教科書ではおなじみの言葉だ。

小説やゲームの中にもごまんと出てくる。

だが、黒田が口にした戦争は、これまでに数え切れないほど見聞きしてきたそれとは、全く別のものだった。

遠い大陸で始まった戦争は、またたく間に日本国中を飲み込んだ。経済不況を植民地政策で乗り切ろうとした日本は、自作自演で紛争を引き起こし、中国侵略を開始したわけだけど、アメリカやイギリスが中国を支援したことで、侵略戦争は長期化泥沼化していった。

昭和十五年。

黒田は旧制第一高等学校を主席で卒業し、帝国大学法学部に入学した。

そしてその翌年の二月八日に、英米の厳しい経済制裁で追い詰められた日本は、当時イギリス領だったマレー半島とハワイの真珠湾を攻撃した。

「日本陸軍の生みの親が誰なのか、ご存知ですか？」

「知るわけないだろ？」

「それもそうですね」

さらりと告げられてむっとした。

さつき、自分が口にしたのと同じ言葉だ。

負けず嫌いがむくむくと頭をもたげたが、知らないものは知らないのだから、どうしようもない。

悔しさを隠して、顎だけで先を促した。

「山県有朋という人で、吉田松陰の弟子の一人です」

「しょーいんって、あのしょーいん？」

「そう、あの松陰」

黒田自身から聞いた名前なのに、以前からの知人の名前が出たような気がして、わずかに身を乗り出した。

幕末 徳川幕府の末期だなんて大昔の話だ。

明治も昭和もはるかな過去で、戦前の日本も右に同じ。

でも、黒田の話の聞いていると、だんだんとそんな風に思えなくなってきた。

山県有朋は、吉田松陰の弟子の中では下っ端だ。

本当に革命に奔走した高弟たちはことごとく二十代の若さで亡くなっているから、徳川幕府が倒れた後の日本の舵取りをしたのは、彼らの後ろにいて、先輩連中が死に絶えた後、最終的に革命の果実を手にした小者連中だった。

黒田は遠い昔のことを、見てきたように口にする。

法学が専門だというけど、日本史だってなかなかのものだ。

黒船が浦和にやってきて日本に開国を迫った時、当時の日本人は幕

府が外国船を追い払うと信じて疑わなかった。けれども時の為政者は、恫喝に負けて国を開いてしまった。

そもそも幕末の革命は、外国の侵略から日本を守るために、天皇を中心とした新しい国を作るために始まったものだった。

それなのに、明治の初めから太平洋戦争でこてんぱんにやられるまで、日本は侵略戦争にあけくれた。

人間のエゴだと黒田は言う。

人間のエゴがこの世の地獄を作り出し、いもしない神を作り出すのだと。

「愛国心なんてものは、自然に生まれてくるものでしょう？ それを無理やり押し付けて、国のために死ねと言う。大した考えもなく戦争を起こした上、国のために戦って死ねば、靖国神社に祀られて神になれるだなんて……」

はっと笑って、唇をかみしめた。

ずっと細められた切れ長の目は、闇以外の何かを見つめている。

薄ら寒い思いで、俺は背後を振り返った。

公園の中ほどで平和の火が燃え続けている。

夜の中に浮かび上がる炎は、きれいというより、不気味だった。

太平洋戦争は始まって半年ぐらいは、連戦連勝だった。

東は中部太平洋、西はインド洋、北はベーリング海、南は珊瑚海、そして中国大陸。

日本軍は各所で戦い、戦場はどんどん拡大し、兵士たちはあらゆる戦場を薄く広く覆いつくしていった。

そして、昭和十七年六月のミッドウェー海戦で破れた後は、アメリカ軍を中心とする連合軍が日本軍を圧倒し始めた。

大学の繰り上げ卒業は、太平洋戦争とともに始まった。

同じ卒業生でも、理工科系は兵器開発などの研究機関に回されることが多く、下士官や将校として戦場に送り込まれたのは、主として文系の卒業生たちだった。

卒業をひと月後に控えたあの日。

したたるような緑の中、蝉がかまびすしく鳴いていた。

目の前で深々と頭を下げた男の頭髮にちらほらと白いものが混じっていたことさえ、今でもはっきりと覚えている。

「娘を説得してもらいたい」

その男　百合の父親である河島浩輔は、面倒をみてきた書生を見据えてそう言った。

「君が帝大に入学した年に、君が無事大学を卒業したら、中古城君との縁談を考え直しても良いと言ってしまったんだ。私は君を買っていたし、君と百合は似合いだとも思っていた。だが、わかってくれたまえ。私はあれが可愛いのだよ」

「はい」と答えると、男はほっとした顔でうなずいた。そんなに気を使わなくても、自分の立場はわかりすぎるほどわかっている。

ただ、贅沢を言わせてもらえば、もう少しだけ夢を見ていたかった。消え行く命を惜しむかのように、蝉はいつまでも鳴きやまない。

寂寥とした砂漠の中に、なすすべもなく立ち尽くす自分の姿が、陽炎のように浮かんで消えた。

乾いた砂が音を立てて流れていく。

砂に同化した身体が崩れ、虚無の中に埋もれていく。

「百合さんが……お嬢様が幸せになって下さることが、私の一番の望みですから……」

「すまない」という呟きとともに、男の手がぽんと肩にのせられた。口にした言葉はまぎれもない真実なのに、作り笑い一つできない自分が惨めだった。

思いを口にしないで良かった。

自分に自信がなくて、あやふやな態度をとり続けていて正解だった。

その足で寮に戻り、苦勞して手紙をしたためた。

美しい女給と恋仲になり、関係を持ったすえに女が身ごもった。

だんな様に恥をかかせ、お嬢様にも合わせる顔がない。

それは、学友から聞いた実際にあつた話に、多少の脚色をしたものだった。

「百合さんは信じてくれるだろうか？」

口にした途端、信じて欲しいという気持ちと、信じて欲しくないという気持ちとが、せめぎあうように溢れてきて、こんなことではだめだと思ひ、もう一度、ペンを握りなおした。

どこの戦場でどんな死に方をしても、決して悲しんだりしないように、読んだ途端に愛想がつきて、百年の恋も冷めるような手紙を。思わず漏らした苦笑は涙となり、便箋の文字をにじませた。

涙のしずくに吸い込まれていく文字の上に、濡れた指先で本当の思いをしたためた。

あなたが好きでした

今も好きです

だからあなたは

私を嫌いになって下さい

29・それは一つの純愛

「おや、もう、こんな時間だ」

驚く黒田の右手には、またあの懐中時計が握られていた。

「お、おい！」

俺はあせって黒いスーツの胸倉をつかみ、強引に自分の方に振り向かせた。

「時間はあると言ったじゃないか！ これでおしまいなんて言うなよな、話はまだ終わっていないし、俺には聞く権利があるはずだ！」

「け、権利？」

こちらの剣幕におされまくった男は、片方しかない目をしばたかせた。

現実逃避もあつたのかも知れない。

俺はいつしか黒田の話にのめりこんでいた。

時間の感覚も場所の感覚も失われ、六十年以上も昔のことが、昨日のこのように胸に迫ってくる。

「百合はあんたの嘘を信じたのか」

返ってきたのは、いいえという言葉だった。

「あの後、だんな様から手紙を頂きました。百合さんは、私に会わせて欲しいとおっしゃったそうです。本人から直接話を聞くまでは信じる事ができないと……。彼女の言葉はきちんと筋が通っていて、誰も説得することができませんでした。困り果てただんな様は、私は出征する日まで、百合さんを屋敷に閉じ込めることにしたのです」

だからこそ、東京駅のホームに現れた百合を見た時は驚いた。出征兵士を送る蒸気機関車はすでに動き出していて、よるめきホームに崩れ落ちたその人に、手を差し伸べることすらできなかった。

あの誇り高い少女が、周囲の目を気にすることもなく、立ち上がることも忘れたように、じっとこちらを見つめていた。

他ならぬ自分が、百合にあんな顔をさせていることがたまらなかった。

あの瞳を忘れることなど絶対にできない。

「ねえ、馬鹿じゃない？俺はあんたのこと、そんなに知っているわけじゃないけどさ、好きな女にキス一つできないくそ真面目な純情青年に、女を孕ませられるはずじゃないか」

形勢逆転とばかりに冷たい視線を送ると、黒田は無言でうつむいた。「あなたのおっしやる通りです。私の嘘は稚拙でした。でも、今はわかるんです。多分、どんな嘘をついたとしても、百合さんをだますことなんてできなかった」

（そうだろうな）

気の毒だけど、その通りだ。

十二歳と八歳。

恋愛からはほど遠くても、初めて会った時から、二人は互いに惹かれあった。

だからこそ、誰にも心を開かぬ少女が初対面の時から黒田にだけは笑顔を見せたのだ。

二人の成長とともに育っていった思い。

彼らがもう少し早くに生まれていれば、身分を超えた恋は成就していただろう。

30・幸せの定義

平時より六ヶ月も早い昭和十七年九月に帝国大学を卒業した黒田は、陸軍経理学校での八ヶ月にわたる教育の後、主計見習士官としてビルマに赴いた。

「ビルマってどこ？」

「ミャンマーのことです。今は軍事政権が支配していて、何だか物騒なことになっていますけど、基本的には敬虔な仏教国で、一般の方はとても親切です。あちこちに鳥を売る店がありますね。随分と繁盛しているんです。家で飼うのか、それとも焼き鳥にでもするのかと見ていると、たった今、買った鳥たちを、空に放してやっているではありませんか」

黒田が両手を広げると、飛び立つ鳥たちが見えた気がした。

俺の中では過去と現実がゴチャゴチャになっているが、どうやら黒田も同じらしい。

「私はあの国のことを思うたびに複雑な気持ちになるんです。多くの民衆が神に寄り添うように生きているのに、国は貧しく、軍事政権の弾圧で大学だって閉鎖されたまま。おまけにひどい天災に見舞われて……不幸続きだ」

そこで小さなため息をつき、物憂げな瞳を宙にさ迷わせた。自分のことを話していたのに、いつの間にか他人の話にすり替わっている。

「あんたって、変わってるな」

そう呟いた途端、黒田は不本意そうに唇を尖らせた。

「私はいたって平凡な人間です。変わっていると思うのなら、それ

はきつとジェネレーションギャップのせいだ……」

「いや、違う、そうじゃない」

俺はもどかしい思いで、相手の言葉を遮った。

「最初は自分の不幸話を聞いて欲しいのかと思ったけど違った。自分のことなんかどうだっていいんだ。あんたの願いは自分の幸せじゃなく、百合の幸せだ。ああそうか！ わかったぞ、あんたが戦場から逃げたのは自分のためなんかじゃない、百合のためだ！」

「どうしてそんなことがわかるのです？」

凶星をさされて動転しているのか、黒田の声はうわずっていた。

(似てるからだよ)

俺は心の中で言葉を返す。

(あんたと俺が似ているからだ。あんたが抱えていた鬱屈は、俺が抱えていたのと同じもの。俺は吉田が好きで、でも、自分と吉田では全然吊り合わなくて、告白することさえ、ばかばかしいと思ってた)

でも、俺たちには決定的に違う所がある。

俺は自分のことしか考えていなかったけど、黒田の判断基準は百合の幸せだ。

幸せにできると判断したら、迷うことなくさらっていただろう。

ただ、幸せの定義そのものが間違っていた。

未来を失った瞬間に、黒田は百合をあきらめた。

だが、約束された未来など砂上の楼閣だ。

そして、戦場に届いた一通の手紙に、黒田は打ちのめされることになる。

差出人は百合の父親だった。

31・運命の落とし穴

予定より半年ほど遅れで、百合は朝鮮総督府に勤める許婚のもとに嫁いでいった。

当初、祝言は日本で挙げる計画だったが、戦況の悪化がそれを許さなかったのだ。

百合は最後まで抵抗したが、迎えに来た中古城家の人間に促され、強引に船に乗せられた。

ところがそれから三ヶ月もしないうちに、泣く泣く大陸に渡った花嫁は、婚家から送り返されてきた。

追いかけるようにして届いた手紙には、医師の診断書が同封されていた。

検査の結果、子供が生めぬ体であることが、わかったのだという。百合の嫁ぎ先だった中古城家は、百合の家よりもはるかに家格が高かった。

あまりにひどい仕打ちに百合の父親は呆然となったが、抗議しようにも相手は遠い海の方こうだ。

屋敷に戻った百合は、崩れるように床についてしまった。

何も目に映さず、何も聞こうとしない。

じっと布団に横たわったまま、嘘で塗り固められた黒田の手紙を、宝物のように抱きしめているという。

『百合は嫁いで行く時でさえ、その手紙を手放そうとしなかった。こんなことになるのなら、たとえば今のいつときでも、君たちを夫婦にしてやれば良かった』

手紙は謝罪の言葉で結ばれていた。

だが、謝罪など、一体、何になる？

黒田が所属する第三十一師団は二週間後にインパール作戦に参加することが決まっていた。

主計見習士官である黒田の任務は、経理上の事務に加え、食料、衣服、軍需品の調達と保管、軍事施設の設営などで、大卒のエリートゆえの比較的恵まれたポストと言えた。

半年後には少尉になることも決まっている。

だが、そんなことはどうでもいい。

問題はその時まで生きていられる可能性が限りなく低いことだ。任務上、軍のふところ事情を知る立場にある黒田には、インパール作戦が失敗に終わることが、作戦が実行に移される前からわかっていた。

「その頃の日本はギリ貧でした。ミッドウエー海戦で四隻の主力空母を全て失い、続くガダルカナルの攻防戦では世界最強と言われた航空隊が壊滅的な被害を受けた。制海権も制空権も失って、輸送船だって七割から八割がアメリカの潜水艦に沈められてしまう。そんな状況下で展開された、史上まれにみる稚拙な作戦とでも申しましようか」

淡々と話し続ける黒田の顔からは、一切の表情が消えていた。

まるで、闇に浮かんだ能面と向き合っているようだ。

黒田の話は怪談ではないが、巨大な墓地とも言える平和公園を見下ろしながら聞く戦争話は、ある意味、怪談よりもはるかに不気味だ。

ビルマからアラカン山脈を越えてインドのインパールに侵攻し、イギリスの支配下にあるインドを独立へと導くという、壮大だが、戦

略上はほとんど意味をなさない作戦は、無能な一人の司令官によって提言され、天皇直属の最高統帥機関である大本営に認可された。

作戦には三十万人もの兵士が動員されたが、用意された食料ではインパールまではとてもたない。

代わりに荷物運び兼食用として牛を連れて行けという。

富士山級の峻険が連なる山脈越えは、山肌にはりついて進む危険な道の連続で、ビルマの貧しい農家から徴発した牛のほとんどは、背負った食料ごと谷底に落ちてしまった。

それ以前に、餌となる草も生えない山の上では、牛はもちろん軍馬だって生きられない。

結局、連れてきた牛も馬も全て失って、人間だけが残った。

32・銃剣

「食料を現地調達せよと言われても、山岳民の集落で売ってもらうか、奪い取るしか手立てがない。イギリス軍の攻撃をかわしつつ、食料を分けてくれそうな村を探し回りましたが、小さな村のわずかな備蓄食料をせしめたところで焼け石に水というものです」

たまたま足を踏み入れた集落で、潜伏していたインド兵に襲われた。小銃を撃ちまくり、何とか追い払うことに成功した後、あらためて周囲を見て回ると、敵兵と味方の兵の死体が一つずつ転がっていた。周囲には誰もいなかった。

自分と同じ年の初年兵は、新婚の妻を日本に残してきていると言っていた。

無念そうに見開かれた目を閉じてやり、亡骸に向かって手を合わせながらも、心の大半は別の思いにとらわれていた。

ここから先は死の世界だ。

だが、今ならまだ引き返せる。

食料も医薬品も武器も弾薬も届かないが、兵士だけは内地から今も時折補充されていて、潜水艦の攻撃にさらされながらも、日本の輸送船は危険な海を行き来していた。

考えたのは、ごく簡単は筋書きだった。

インド兵との戦闘で重症を負った。

それにも屈せず敵を敗退させ、味方の亡骸を埋葬して帰還した。

軍隊は個人の思考力を限界まで劣化させる所だから、作り話もこのぐらいシンプルな方がいい。

腕の中の小銃を見下ろした。
すぐに完治して前線に復帰出るような傷では意味がない。
だが、背後にはたった今越えてきたアラカン山脈がそびえていて、
手や足を傷つけるのは不都合だ。

銃剣に自分の顔が映っていた。
狂気をはらんだ双眸が、じっとこちらを見つめている。

「目はどうだろう」
銃剣で目をつぶせば、隊付きの若い軍医の手には負えないはずだから、最低でも野戦病院までは下がるはずだ。

指で銃剣の切っ先をなぞってみた。
指先に薄く引かれた血の筋を確認し、小銃を地面に立てるようにして、慎重に確度を調整していく。
戦場から逃げ出そうとしているのに、後ろめたさは不思議なほど感じなかった。

自分は平凡な人間だ。
この時代に生まれた者のさだめだというのなら、人なみに死んでみせることぐらいは、するつもりだった。
天皇バンザイと叫ぶ気にはなれないし、神風なんて絶対に吹かないと思うけど、諦めることには慣れていた。

それなのに、なぜなのだろう。
地面に膝をつき、狙いを定めるように目を見開いた。
浅すぎず、深すぎず、執刀する医師のような冷静さで、自分の目を
……。

「うわっ、もう、やめてくれ！」

がまんできなくなった俺は、両耳を押さえて悲鳴をあげた。

「聞いているこっちが痛くなる！」

涙目で訴えると、黒田は苦笑しているような、呆れているような、何とも言えない顔をした。

「ひょっとして怖がってます？ 別に怖がらせるつもりはなかったんですけど」

「怖いっていうか……。銃剣つて、小銃の先にくつついてる刀みたいなやつだろ？ あれで突くなんて信じられない！ ほらっ、鳥肌が立ってる！」

「それはまた……」

黒田は唇の端を吊り上げたが、その隻眼は少しも笑っていない。そりゃあそつだ。

こんな風に話の腰を折られれば、普通は笑うより腹を立てるだろう。

情けない思いでうな垂れた。

ホラー映画も戦争映画も平気なのに、隻眼の男が淡々と描き出す虚無と絶望に彩られた過去はリアルな映像よりもはるかに不気味で、俺は少し、いや、かなり怖気づいていた。

「申し上げておきますが、残った人たちはもつとひどい目にあっています。作戦に参加した三十万人の将兵のうち、亡くなった方が十九万人。そしてそのうちの大半は、戦死ではなく、餓死か戦病死なんですから」

食料もなく、医薬品もなく、傷つき病んだ兵士の多くは、撤退の途中に力尽き、延々五百キロに及ぶ「白骨街道」を作り上げた。

道の真ん中は、まだ歩ける歩行者のための空間だから、歩けなくなった兵士は道の両脇に這うように移動して座り込む。

新しい死体の中には、膝を抱えて眠るように目を閉じたきれいな顔

の若者もいるが、時間が経つにつれてびっしりと八エがたかり、ウジがわき、やがては白骨に成り果てる。

軍服姿の亡骸の周囲で、夜になると青白い燐光が光り出した。

それは、まだ生きている兵士たちに、どんな感慨をもたらしたのか。

「でも、あなたは日本に帰れたんだろ？」

救いを求めるように口を開くと、黒田は目だけでうなずいた。

「でも、百合さんに会うことはできませんでした。今にして思えば、何も知らされぬまま、あの場所で死ぬのが一番だったような気がします。そうすれば、少なくともこんな風に現世をさ迷うこともないわけでした……これって、やっぱり、天罰なんですかね？」

そんな質問をされても、俺には答えられない。

ただ、「天罰」なんて言葉で片づけるのは、あんまりだと思った。

片目に重症を負った上に、極度の栄養失調。

密林をさ迷った末、山の中腹で行き倒れになっていた所で、山岳民に救われた。

軍刀と引き換えに食料を分けてもらい、どうにか山越えして麓の野戦病院にたどりついた時は、悪性のマラリアにかかっけていて、半死半生の状態だったという。

ビルマのラングーンから病院船に乗せられて台北へ。

台北の陸軍病院から九州の小倉に。

小倉の病院に延々と入院させられ、皆がとめるのを振り切るようにしてようやく東京に戻った。

話は何度も聞かされたけど、この目で見るまでは、どうしても信じることができなかつた。
日本の首都である大都會は、焼け焦げた廃墟に変わっていた。

34・あなたを探して

昭和十九年の六月にマリアナ諸島が陥落し、日本軍が築いたサイパン島の航空基地は、アメリカ軍に奪われた。

その結果、日本の都市の大半がアメリカ軍の爆撃圏内となり、黒田が帰国した昭和二十年の夏までに、東京は百回にのぼる空襲を受けていた。

「私は遅かったのですよ」

「まさか……空襲で？」

半ば義務的に訊ねた俺は、「いいえ」という返事にほっとした。

「それじゃあ……」

何が起こったのかを聞こうとした時、黒田は頭上を指差した。

「昭和二十年八月六日午前八時十五分。あなたも広島の方なら、何が起こったのかはご存知でしょう？」

「嘘だろ！」

咄嗟に立ち上がった。いた。

「残念ながら本当です」

静かに答える男の顔をまともに見ることはもうできない。

「で、でも、どうして!？」

疑問を口にしたものの、本当はもうわかってしまった。

眼下には広島夜景が広がっている。

赤茶けた鉄骨は産業奨励館のなれのはて。

偶然であるはずがない。

黒田は敢えてこの場所を選んだ。

全てはこの場所から始まり、そしてこの場所で終わるのだ。

昭和二十年三月十日の東京空襲で亡くなった都民は十万人。それでは生き残った人はどうしたか。

行き場がなくて東京を離れられなかった人もいるだろう。

だが、百合の父親はそうじゃない。

彼の郷里は広島だった。

当時の広島には第五師団司令部をはじめとする名だたる軍事施設がひしめいていたが、B29は上空を素通りするばかり。

なぜか、空襲とは無縁だった。

傷と病が癒えた黒田は陸軍少尉に任官し、内地勤務に回されていた。南方の島々で玉砕が相次ぎ本土決戦が叫ばれる中、休みなどないに等しかったが、空いている全ての時間を使って百合を探し回っていた。

河島家の人間が広島の親戚宅に身を寄せていることを教えてくれたのは、東京の陸軍第三病院に内科医として勤務している、かつての書生仲間の山木だった。

南方戦線から生きて戻って来た黒田を見て、山木は無精ひげの目立つ顔をほころばせたが、河島家の話題になった途端、別人のように表情を曇らせた。

「広島は軍都だからな。だんな様には危ないと申し上げたんだ。でも、お嬢様の具合がおもしろくなくて、きちんとした病院のある街でなくては、どうしても心配だと……」

思わず相手の腕をつかんでいた。

「どういうことだ？ まさか、百合さんは空襲でおけがを!？」

「違う、けがなんかじゃない」

けがの方がまだとても言いたげな苦々しい表情を一瞬だけ見せてから、男は医者顔をとり戻し、聞いたことのない病名を口にした。

「こうげんびょう?」

思わず眉をひそめると、ざらりと無償ひげを撫でながら、難しい顔で頷いた。

「原因不明の難病だ。子供の頃から病弱で、しょっちゅう熱が出ていたのは、そのせいだ。たぶん長くは生きられない」

あくまでも事務的であろうと努力しているが、声にはありありと動揺が現れている。

だが、そんなことは、どうでも良かった。

急いで配属先に戻り、いもしない身内の葬式をでつち上げ、三日間の休みを手に入れた。

焼け付くような夏の日。

黒田に乗せた汽車は、名古屋、大阪、神戸と空襲で焼けた街々を走り抜けたが、広島駅のはるか手前で動かなくなった。

「閃光が走り、ドーンという音が……。光、音、そして最後に風。熱をはらんだものすごい突風が吹いてきて、ガラスが次々割れて、床にはいつくばったら、今度は車両が傾いて……」

あちらからも、こちらからも、乗客の悲鳴や叫び声が聞こえてくる。黒田は、扉をこじ開けて外に出た。

直撃弾をくらったのかと思っただが、そうではなかった。

地上の騒ぎを傍観するように、頭上には真っ青な空が広がっている。

「爆弾だ！ 広島に新型の爆弾が落ちた！」

「あ、あれを見る！」

口々にわめきたてる人々は、例外なく同じ方角を指差していた。

西の方、ちょうど広島市街のあたりから、真っ黒い入道雲が立ち上がっている。

「待つて！ あなた、そのけがでどこへ行くつもり？！」

駆け出そうとした途端、誰かに腕をつかまれた。

額に押し付けられたハンカチが真っ赤に染まる。

たしかにひどい傷なのに、痛みは少しも感じなかった。

心は百合のことだけにとらわれていた。

「実は、そこからの記憶はとぎれとぎれでして、どうやって広島に入ったのかも覚えていないんです。でも、こうして目を閉じると、フラッシュバックみたいに色々な光景が目に見えかぶります。それがどれも悲惨でしてね」

当初、街は炎に包まれていた。

ものが燃える音に交じって聞こえてくる、断末魔のうめき声や、泣き叫ぶ子供の声。

あたりは夜のように真っ暗で、燃え盛る炎の中に、逃げ惑うシルエツトが浮かんで消えた。

突然の土砂降り。

手のひらで受けるとその色は真っ黒で、逃げ惑う人々がまとったボロ口を、不吉な色に染め上げた。

一気に気温が下がり、夏だというのに、ひどく寒い。

闇がようやく薄らいだ頃、広島町は見渡す限りの焼け野原に変わっていた。

木造建築は全て焼け、コンクリートは粉々に四散して、炭化した死体や、焼け焦げた瓦礫の間を、幽鬼のような人達が救いを求めてさまざまに迷っている。

必死で百合を探しながら、黒田は少しずつ正気を失っていった。

川の中、瓦礫の下、救護所……。

年齢はおろか性別すらもわからぬ死体を一つひとつ確認していくうちに、奇妙な声が聞こえるようになったのだ。

『千の迷える魂を導け。そうすれば、お前の望む奇跡を一つだけ起こしてやるわ』

頭の中に直接響いてくる声の主は、男のようでもあり、女のようでもある。

立ち止まって、周囲を見回しても、それらしい人物はどこにもいない。

36・あたたかい手

寄せては返す波の音のように、夏空にこだます遠雷のように、決して消えることのないその声が頭の中に直接響いてくるのだと気がついた時、黒田は自分が狂っているのだと思った。

「はっ、ははは……」

地面にはいつくばったまま、血と汗と泥と煤とで汚れた軍服から、勢いよく階級章を引きちぎった。

狂うなら、狂えばいい。

だが、奇跡を願うなんて、どうかしている。

神などいない。

どこにもいない。

いるのは愚かな人間だけだ。

勝てるはずのない戦争。

無謀な作戦。

美辞麗句に彩られた地獄への片道切符。

そして、ここが……。

ここが、地獄だ。

人間しかない。

人間だけが、鳥や虫や木や花や、あらゆる生命を巻き添えにして、自分と同じ人間をこれほど残忍に、徹底的に殺戮することができるのだ。

積み重ねた死体が燃やされている。

チロチロと燃える火の中にもいるかも知れない。

いや、足元に転がっている骨のかけらこそが、百合かも知れないのだ。

「百合さん、百合さん、私です、黒田です。あなたに伝えたいことがあるんです。私は……私は……あなたのことが……あなたのことだけが……」

好きでした。

ずっと、ずっと好きでした。

愛しくて、大切に、自分自身よりもはるかに大切に、あなたに幸せになって欲しくて、思いを伝えることができませんでした。

それなのに、こんなにも愛しているのに……。

「なぜなんだ？ なぜ、あなたを見つけることができない!？」

散らばった骨をかき集めて抱きしめた。

もはや進むべき道もなく、帰るべき場所もない。

「……柳瀬さん？」

「……ッ……」

「柳瀬さん、泣いているんですか？」

「泣いてるよ！ 悪いか!？」

顔を上げて叫んだ途端、黒田は淡く微笑んだ。

「あなたは優しい方ですね。百合さんもきつと喜んで……」

「違うよ！ 俺はあんたが、あんたのことが……」

「おやおや、恋の告白ですか？ でも、私にはそちらの趣味は……」

「ふざけるな!」

おどけて笑ってみせる姿を見ていられなくて、その胸に顔をうずめてしまった。

体温などあるはずがないのに、あやすように背中を撫でる手があたたかい。

その手のぬくもりが切なくて、俺はいつまでも泣き止むことができなかった。

37・終わらない夜はない

「柳瀬さん、私とあなたは何だか似ていると思いませんか？ もっとも私は、あなたのように泣き虫ではありませんが……」

「な、な、泣き虫！ お、俺が！？」

「最近の若い人は、皆さんそうなんですかね？」

この上なく失礼なことを、真顔でさらりと口にする。

頭突きの一つでもくらわせてやろうかと思ったが、その肩越しに見えた空に、俺はたちまち目を奪われた。

夜は永遠に続くのだと思っていたのに。

下へゆくほど闇が薄らいでいく。

建物のシルエットを映したあたりは、群青と紫とオレンジを一気に水の中に溶かし込んだような、何だか不思議な色をしていた。

「終わらない夜なんてありませんよ」

静かな声が耳朵を打つ。

東に背を向けたまま、黒田は懐中時計の文字盤を磨き始めた。

「どうして俺が考えていることがわかるわけ？」

「さあ？ 年の功ですかね」

「としの……何？」

「お年玉の年に功労賞の功。亀の甲より年の功なんてことわざがありましたね、長年の経験は貴重だという意味です。ただ、私の場合は二十五年と少々ですから、本当にこの言葉が当てはまるかどうか……」

「当てはまるわけないだろ！ 人のことを泣き虫よばわりして、何が年の功だ！ 二十五歳なんて、俺たちとそんなに変わんねえよ！」
こちらの剣幕に少しも頓着することなく、黒田は言葉を返してきた。
「でもね、昭和二十年の男性の平均寿命は二十三歳なんです。今は八十歳ぐらいでしたっけ？ 時代は変わりましたねえ。必ずしも良い世の中とは言えませんが、国のために死ぬことを強要された時代よりは、はるかにましだ」

一つしかない目を細めてしみじみと言うものだから、氣勢をそがれて、うなずいてしまった。
確かに黒田の言う通りだ。

妙な閉塞感がただよっていて、クレイジーなやつらがウヨウヨしてるけど、今の日本人は、南方戦線に送られて餓死することも、特攻機に乗せられることも、空襲から逃げ惑うことも、原爆で死ぬこともないだろう。

「二十五歳と少々なんて、おかしい言い方をしましたけど、実は私自分がいつ死んだのか、わからないんです。もつと言え、死んだという意識すらない。だから時折、思うんですよ。本当はまだ昭和二十年なんじゃないかって……。自分は正気を失ったまま、妙な妄想にとらわれているだけなんじゃないかってね」

そんな疑問を抱かせたのは、他ならぬ、あの不思議な声だった。

『千の迷える魂を導け。そうすれば、お前の望む奇跡を一つだけ起こしてやるっ』

無視し続けていた声が、時間の経過とともにだんだんと大きくなってきて、耐え難いほどに心を侵食し始めて、しまいには、その声以外、何も聞こえなくなつた。

それでも必死で百合を探した。

探していたつもりだったけど、実際は、放射能にやられて、あるいはひどい出血で、動けなくなっていたのかも知れない。

「そして、気がつくこんな姿に。これじゃあまるで葬儀の参列者ですよね」

黒尽くめの男が情けなさそうに肩をすくめる様を見て、俺ははじかれたように立ち上がった。

そうだ、葬儀の参列者だ。

初めて会った時、俺も同じことを思った。

あの時、黒田が口にした言葉。

あれこそが……。

「俺のこと、千人目のお客だって言ってたよな？ 奇跡が起こせるかどうか、ためしてみろよ、うまくいけば、あんたの大切な人に会えるかも知れない！」

「……………」
ようやく苦勞が報われる時がきたというのに、男は少し啞然とした顔で、じつとこちらを見つめている。

「どうした？ 何で黙ってるんだ？」
不安ともどかしさがこみ上げてきて、思い切り相手の肩を揺さぶった。

何の抵抗もしないで、ほうけたように揺さぶられるままになっていた上体が、やがてがくりと前に傾ぎ、そのまま動かなくなったと思ったら、いきなり腕をつかまれた。

「あなたは人のことばかり心配してますけど、ご自身のことは気にならないのですか？」
どこか責めるような口調だった。

「は？ 何、言ってるんだよ？ あんたこそ、俺のことより自分のことだろ？」

同じような口調で言い返すと、腕をつかむ手に少しだけ力がこめられた。

「千人目があなたで、本当に良かった」
つかまれた腕から、かすかな震えが伝わってくる。

「そりゃどうも」
いちおう言葉を返したけど、男が何に感激しているのか、俺にはさ

っぱりわからなかった。

「百年は草も木も生えないと言われたものですが……」
鉄骨にひっかけていた傘を手にとって、黒田はゆっくりと立ち上がった。

感慨深そうに細められた瞳には、夜のベールをゆっくりと剥いでゆく広島街の街が映っている。

「あの胡散臭い声、私はてっきり自分の妄想の産物だと思っていたのですが、そうではありませんでした」

「えっ、本当に？ ど、どうしてわかったんだ?!」
思わずネクタイをつかむと、黒田はにこりと微笑んだ。

「奇跡が、起きたからですよ」

いつしかその身体は、金色の光に包まれていた。

いや、目の前の男だけじゃない。

黒田に触れた俺の手も金色だ。

あせって顔を上げた俺は、目に飛び込んできた光景に息を飲んだ。

空も、川も、街も、視界に映る全てのものが、金粉をぶちまけたように輝いている。

「……行くのか？」

光の輪郭に縁取られた男は、静かな微笑を浮かべたまま、首を横に振った。

「行くのは私ではなくあなたです。ようやく時が満ちたようですよ」
「時が満ちた？ どういう意味だ？ お、おい、一体どこへ!？」

叫んだ途端、俺の身体はふわりと宙に浮かんでいた。

どんどん空に引っ張られていく。

わけがわからず、夢中で手足を振り回していると、今ではすっかり慕わしいものになった黒田の声が、直接心に響いてきた。

どこへ行かされるのだった？

あなたに、ふさわしい場所にお送りすると、先ほど申し上げたでしょう？

ここにお連れしたのは、ちょっとした寄り道だったんです。

本当は、ぎりぎりまで迷いました。

でも、決心して良かった。

その声も次第に遠くなっていく。

俺は全神経を集中させた。

起こせる奇跡は一つだけ。

でも、時代が時代ですからね。一つや二つや三つの奇跡では、百合さんを幸せにすることは到底できない。だから、高望みはやめたんです。

もしも本当に奇跡が起こせたら、ほんの短い時間でも良いから彼女に会って、思いを伝えよう。それだけで十分だ……ってね。

それはゆるぎない信念だったはずなのに、あなたに会って、ぐらりと心が揺れたんですよ。

あなたと吉田比奈さんは、まるで私と百合さんのようでした。初めてお会いした時、理不尽な理由で命を奪われたあなたは、駅のホームにうずくまり、白い薔薇を見つめながら静かに涙を流していました。

あなたは繊細で不器用で……吉田比奈さんを守ろうと必死になっている姿を見ると、もう、他人事とは思えませんでした。

だから、決めたんです。もう、おわかりですよ？

百合さんの分も、彼女を幸せにしてあげて下さい。

あっ、そうそう、例の耳鳴りみたいな声は今も聞こえていますから、六十数年後、いえ、がんばって働いて五十年後あたりに……。

黒田の声はそこで途切れた。

金色の光の中、俺は情けなくも、また泣いてしまった。

泣きながら、吉田を助けてくれと黒田にすがりついて懇願したことを、心の中で何度も謝った。

神などいないと、あいつは言った。

賽銭や、お布施や、何らかの見返りを求めるものは、神ではない。

ギブ・アンド・テイクは人間界のルールだから、それに則ったものであるならば、神も信仰も人がこしらえたものに過ぎないと。

「じゃあ、あんたは何なんだ?! あんたこそが、神じゃないのか?!」

答える声はない。

何も聞こえない。

俺の全ては光に解け、黒田圭吾も消えてしまった。

38・光の中（後書き）

そろそろクライマックスです。

。 気合を入れてイラストなど描いてみましたが……下手ですね（苦笑）

イラストはパソコン版のランキングページに掲載。

ここまでお読み頂いた方に心よりお礼申し上げます。

あと少しでもお付き合い頂き、最後にご感想などお聞かせ頂けると嬉しいです

39・通り雨

アスファルトを叩く突然の通り雨。

ビジネスバックを頭上に掲げ、水を跳ね上げながら駆けていくサラリーマン。

その傍らでは、ビルの軒先で雨宿りしている人たちが、街頭ビジョンに流れる映像を手持ち無沙汰に眺めている。

天気予報が大幅に外れると、都会の街は大変だ。

公共交通機関は人であふれ、道路は車で混雑する。

東京に大地震が起これば、一万人の死者が出るなどと言われているが、実際はそんなものではないだろう。

たった今、届いたメールを確認し、ジーンズのポケットに携帯電話を突っ込んだ。

無遠慮に向けられる視線を感じながら、黒のキャップを少しだけ目深にかぶりなおす。

何気なく見上げた先、都会を見下ろす巨大スクリーンには、路上インタビューの一コマが映し出されていた。

『戦争が起こればいいと思うんですよね』

同じ年頃の男が、向けられたマイクに向かってしゃべっている。

数日前に起きた、街中での無差別殺傷事件。

犯人は二十代のフリーターだった。

どうやら事件報道のついでに、犯人とよく似たプロフィールを持つ人間が、路上インタビューの餌食になっているらしい。

携帯電話に犯行を書き込みした犯人の気持ちだが、自分には理解でき

るとその男は言った。

将来に対する漠然とした不安、欲望を満たされない苦惱、そんなものについて淡々と述べてから、男は最後にこう締めくくった。

『戦争が起これば、ヒーローになれるでしょ？ 事件を起こした彼だって、同じ気持ちだったんじゃないかな。こんな日常はもうたくさんだ……ってね。だからね、戦争が起こればいいと思うんですよ』

死んだ魚のようにうつろな目。

不健康そうな色の唇には、薄気味の悪い微笑がはりついていていた。

（黒田、あんたの言うとおりだ）

過去の経験から学ぶことをしないこの国は、破滅に向かって加速度的に進んでいる。

今、戦争が起これば、確かにあの男は最前線に送られるだろう。だが、名もない兵士の一人として、戦場に骸をさらすだけだ。かっこいいヒーローなんて、現実を知らぬ連中が生み出したまぼろしに他ならない。

画面が切り替わったのをしおに、スクリーンから目を逸らした。

通り雨は早くも小ぶりになっていて、人々の足取りもさつきよりゆるやかだ。

俺は、絶え間なく続く人波に少しだけ酔いそうになりながらも、こもり傘を差した黒尽くめの男の姿を、半ば無意識に捜し始めた。あの金色の光の中で姿を見失った瞬間から、ずっと黒田を探し続けている。

無駄だとわかっている、そうせずにはいられないのだ。

明けない夜はないと黒田は言ったが、どっぷりと浸かりこんだ闇の世界から俺を引つ張り上げてくれたのは、他ならぬあいつだった。あの時の震えるような感動は、年を経ることに鮮やかになっていく。広島市の片隅で起きた、俺と黒田以外は誰一人知らぬあのできごと。あいつはこの世に存在する全てのものを巻き込んで、他人である俺のためだけに、たった一つの奇跡を起こした。

40. ずっと好きでした

空調の音と、耳慣れない小さな電子音とが、単調なリズムを刻んでいる。

人工的で乾いた空気は、全く馴染みのないものだった。

(うるさいな。誰か、あの音をとめてくれよ)

黒田が消えてしまった今、心の声に伝えてくれる者はいない。

仕方なく重いまぶたを持ち上げると、シミ一つない真っ白な天井が目飛び込んできた。

「ここ……どこだ？」

発した言葉は声にはならず、乾いた唇がかすかに動いただけだった。駅のホームでもなければ、学校でもない。

山の中の別荘でもないし、広島市街を見下ろす原爆ドームの上でも、もちろんない。

そして、奇妙な電子音はずっと鳴り続けている。

耳をふさごうとして、ぎくりとした。

身体が……動かない?!

胴体をピンで留めつけられた昆虫標本にでも生まれ変わったのだろうか？

いや、標本はすでに死んでるわけだから、いくらなんでもそれはないだろう。

浮かんだ思いに自分で突っ込みを入れた時、右手に触れる柔らかな感触に気がついた。

ほのかに伝わってくる、血の通った肌のぬくもり。

身体に電流でも通されたように脳が一気に覚醒し、それに呼応するように電子音の間隔が短くなる。

苦勞して首だけ動かすと、俺の手をしっかりと両手で包み込んだまま、吉田が目を閉じていた。

震えるような思いで、疲れた寝顔を覗き込んだ。

折りたたみ椅子に腰かけて、片頬だけをベッドに預け、泣きながら眠ってしまったのか、ほんのりと染まった頬には涙の跡が残っていた。

吉田が生きている！

ひよっとして、俺も……生きてるのか？

電子音を絶え間なく発し続けているのは、ベッドの傍らに置かれた心電図モニターだった。

身体が動かないのは当然で、あちこちギプスで固定された身体からは、複数の管やコードがのびていた。

包帯でぐるぐる巻きにされているわりに、痛みは不思議と感じなかった。

やたらと眠いのは、たぶん痛み止めのせいなのだろう。

細い指に指を絡めると、吉田はゆっくりと目を開けた。

どれだけ心配させたのか検討もつかない。

俺の顔を見るなり、子供のように泣き出した。

愛しさと切なさがごちゃごちゃになって、俺はベッドに横たわったまま、唯一動く右腕でそつと少女を抱き寄せた。

「吉田が好きだ。ずっと、好きだった」

花びらのようなキスが、ふわりと唇に落ちてきた。

傘を差さなくても、言葉が通じる。

互いを見つめることができ、こうして触れ合うことも……。それはどんなに願っても、得られなかったものだ。

俺は今、奇跡の中にいる。

「私も好き。柳瀬君が大好き」

きらきら光る宝石のような瞳がまばたきして、涙のしずくが俺の頬に落ちた。

話したいことが、たくさんある。

でも、それを語る未来は、用意されているのだろうか？

ふと浮かんだ疑問について、思いを巡らせることはできそうになかった。

頭にクモの巣が張っていくように、次第に意識が遠のいていく。

でも、決していやな感じじゃなく、長い旅の終わりに、重い荷物を下ろしたような気分だ。

吉田の手を握り締めたまま、俺はすいこまれるように目を閉じた。

41・奇跡の真相1

全身打撲、左肋骨及び左腕骨折、左足首捻挫、無数の擦過傷……あげていけばきりがない。

つまり俺は、ボロボロの状態で意識不明のまま病院に運び込まれた。だが、本来はそんな生易しいものではなかったはずだ。

ホームから突き落とされ、駅を通過しようとする列車に激突し、肉体も意識も四散した。

すべてがあまりに突然で、すべてがあまりにあっけなくて、俺は自分が死んだことさえ理解できずに、いつまでもホームに立ち尽くしていた。

黒田が起こした奇跡、それは、事件の直前まで時を戻すことだった。つまりは全ての人間が、同じ時間を二度経験させられたというわけだ。

死んだ者は生き返り、生まれた者は母親の体内に逆戻りし、何事もなかったかのように同じ過程を繰り返す。

密やかに、大胆に。

奇跡に気付く者はいない。

リセットされた時の中、俺はまたもやホームから突き落とされ、列車に轢かれた。

同じ悲劇の繰り返し。

だが、両者には決定的な違いがあった。

右手と右足だけで辛うじて身の回りのことができるようになった頃のこと。

病室の窓から外をぼんやりと見てみると、一人の患者が週刊誌を小脇に抱え、松葉杖をつきながら俺の病室にやってきた。

患者の名は、如月一樹。

サッカーの試合で右足を骨折したというスポーツバカは、アディダスのロゴが入ったTシャツとハーフパンツをパジャマ代わりに愛用し、リハビリと称していつも病院内をうろついている。

年が同じで、病室が隣同士で、きれいな女の子が毎日のように見舞いに来る。

その三点が奴にとってはツボだったようで、俺の所にも足しげく通ってくる。

「ココン、コン！」と不思議なノックとともに入って来た男は、ベッドにドンと腰を下ろし、夏でもないのに日焼けした顔でにっこり笑った。

俺にはこんな爽やかな笑顔はできない。

感心して見ていると、急に真面目な顔になり、身を乗り出してきた。

「病院中、お前の噂で持ちきりだ。医院長は緘口令を敷いたぞ」

「は？」と聞き返した途端、顔面に女性週刊誌を突きつけられた。

広げられたページには、駅のホームが映っていた。

『高校教師、愛憎の果ての殺人未遂。ホームから突き落とされた美少年は教え子だった！』

ショッキングな見出しのそばに、スーツ姿の麻賀の写真と、学生服姿の俺の写真が並べて掲載されている。

口元に微笑を浮かべた麻賀雄介は、いかにもおばさん受けしそうな風貌だ。

そして、教室の壁にもたれた俺の横顔は、誰に隠し撮りされたのか

は検討もつかないが、目の部分が黒でマスキングされているにも関わらず、ちよつとしたブロマイドのような写りの良さだった。

「なっ、なんだ、これ！」

期待通りの反応だったのか、如月は上機嫌で破顔した。

「な？ おもしろいだろ？ 見出しと写真だけ見たら誤解されることと請け合いだ。もっとも、最後まで記事を読めばそうじゃないことがわかるけど」

俺は週刊誌を奪い取り、びっしりと書かれた文字を目で追った。

「こうというのが女性読者には受けるんだよ。でも、驚いたな。彼女、代議士の一人娘だって？ 名前はA子さんになってるけど、広島出身で高校生の娘がいる代議士なんてそうそくないから……」

物知り顔で話し続ける相手を、冷やかな一瞥で黙らせ、すぐまた紙面に視線を戻した。

高校の体育教師が、美しい教え子に恋をした。

彼女を目で追っているうちに、その視線が一人の少年に向けられていることに気が付いた。

現行犯で逮捕された麻賀は、『目障りな存在を排除したかった』と警察に語ったという。

42・奇跡の真相2

「この事件、関係者が美形揃いだろ？　そこにマスコミが目を付けて、センセーショナルに報道したものだから……」

俺の部屋にテレビがない理由がそれでわかった。

殺人未遂事件の被害者にショックを与えないための病院側の配慮だったのだ。

吉田比奈の父親がマスコミに圧力をかけたため、報道自体はすぐに沈静した。

だが、その反動もあって、ネット上では大変なことになっているらしい。

「あちこちのブログにお前や例の教師の写真がアップされていて、この病院にも問い合わせがきている。俺の親父、実はこの病院の雇われ医師なんだ。親父には黙ってるって言われたけど、本人だけ知らないなんて、やっぱり、まずいだろ？」

「ネット上で公開されているのは、麻賀と俺の写真だけ？」

こちらの真意を汲み取った如月は、神妙な声でうなずいた。

「探してみたけど彼女の写真はなかった。父親が手を回したんじゃないかな」

「だったらいいよ」

「よかないだろ！　おい、下ばかり向いてないで、少しはこっちを見るよ！　俺はこれでもお前のことを心配してっ！」

記事に気をとられていると、でかい手に顎をつかまれ、顔をぐっと持ち上げられた。

「柳瀬、そんなにショックだったのか？」

心配顔でそんなことを言う。

ピンとはずれのセリフがおかしかったが、ここで笑うのはさすがに失礼だろう。

「如月、違うんだ。ショックを受けてるわけじゃない。俺は自分が誰に殺されそうになったかも知ってるし、写真を公開されたぐらいで落ち込んだりしない。むしろこの記事に感謝している。おかげでずっと知りたかったことを知ることができた」

感謝の言葉を述べてから、一人にして欲しいと告げると、如月は不満そうに眉を持ち上げた。

「お前、ひよっとして俺のことが好きなの？ この体勢だって、しやれにならないと思うけど、誰かに見られてホモのレッテルを貼られても知らないよ？」

如月一樹は、純情で、単純な、スポーツ馬鹿だ。

でも、男友達などいない俺には新鮮でもある。

「変なやつ」

逃げるように出て行く背中を見送って、俺は床に落ちた週刊誌を拾い上げた。

43・ありがとう

(柳瀬さん、怒っています?)

黒田の声が聞こえた気がした。

(痛い思いをさせてしまって、すみませんでした。でも、私が起こせる奇跡は一つきりで、他に方法がなかったのですよ)

わかってる。

わかってるよ。

怒ったりするわけじゃないか。

週刊誌に額を押し当てたまま、嗚咽をこらえるために唇をかみしめた。

最後の最後まで、やってくれた。

あいつのせいで、俺の涙腺は壊れっぱなしだ。

記事の後半には、いくつかの目撃証言が載せられていた。

最初の証言者は、俺を轢くはめになった列車の運転手だった。

『駅の手前の踏み切りに傘を差した男が立っていたんです。遮断機は下りているはずなのに、列車と向き合うようなかたちで突っ立つたまま、微動だにしないんですよ。咄嗟にブレーキをかけたのですが……ええ、全然間に合わなくて……。でも、衝撃は全く感じませんでした』

列車はすぐには止まらない。

きしむようなブレーキあげながら、そのまま駅に突っ込んだ。

そして二人目の犠牲者を轢いてしまふ。

だが、減速していたおかげで、二人目は死をまぬがれた。最初の現場に戻ってみると、一人目の犠牲者は煙のように消えていた。

どんなに探し回っても、衣類の切れ端も、わずかな血痕すら残っていなかった。

二番目の目撃証言は、駅のホームで列車を待っていたサラリーマン。

『通過する列車に気をとられていたので、私自身は少年が突き落とされた瞬間は見えていません。でも、私の右手に立っていた黒いスーツ姿の男性が、その場から立ち去ろうとする人影を呼び止めたんです』

「待ちなさい。自分の欲望のために柳瀬さんを　自分の教え子を殺害しようなんて、許される行為ではありません」

厳かな声がホームに響くと、呼び止められた男は愕然とした様子で振り返った。

「どうして、柳瀬の名を!？」

「あなたの名前も知っていますよ、麻賀雄介さん」

そんな短いやりとりの後、男はぺたりとその場に座り込み、狂ったように笑い出した。

『雨も降っていないのに傘を差していましたね。そんな人がホームにいたら、絶対に覚えているはずなのに、事件が起こるまで、全く気がつきませんでした。あの後、現場は騒然となって、駅員が犯人をとりおさえて、救急車を呼んで、たまたま居合わせた医者が少年の応急手当をして……で、ふと思いついて、その人を探したら、もう、どこにもいなかったんです』

『黒衣の青年は神か天使か？ 美少年との関係は？』
女性受けしそうなキャプションの横に目撃証言をもとに描かれたイラストはなかなかの男前で、黒田圭吾によく似ていた。

「あなたのおかげで、俺はこうして生きているんだな」
週刊誌を閉じて顔を上げると、窓の向こうに澄んだ空が広がっていた。

「黒田、ありがとう」

（お礼はもういいですから、一度ぐらい黒田さんって呼んで下さいよ）

あいつなら、きっと、そういうに違いない。
でも俺は、病室のドアを背にして床に座り込んだまま、肩を竦めた
だけだった。

窓の外に広がる蒼い空。

世界はこんなに輝きに満ちているのに、黒田はこつもり傘を差し続
けている。

お人よしのあいつのことだから、六十年後にまた俺みたいになやつに
出くわしたら、自分のことを後回しにして、手を差し伸べてしまっ
たのだから。

44・通り雨2

時計の針は午後六時半を示していた。
そして、待ち人は来たらず。

「ねえ、柳瀬裕也じゃない？」

「まつさか、あんな有名な人がこんな所にいるはずないよ」

さつきからチラチラとこちらを見ていた連中が、とうとうヒソヒソ話を始めてしまった。

こちらに向けられる視線がだんだんと増えてゆく。

本人たちは小声で話しているつもりなのかも知れないが、甲高い声は丸聞こえだ。

場所を移動するか、それとも……。

携帯電話を取り出し、メッセージを半分ほど打ち込んだところで消去した。

渋滞に巻き込まれた上、慣れない運転で悪戦苦闘しているに違いない。

これ以上のプレッシャーを与えては、事故になりかねない。

(だからやめようって、言ったのに)

後悔した所で後の祭りだ。

さらに深く帽子をかぶりなおそうとした時、街頭ビジョンから、幼い少女の歌声が流れ始めた。

兔追いしかの山

小ブナつりしかの川

夢は今もめぐりて

忘れがたき故郷

いつもJ・POPが流れるこの場所には全くふさわしくない。でも、空気が一気に清涼になるような澄んだきれいな声だった。子供の頃に兔を追いかけたり、フナを釣ったりした記憶を持つ人なんて、今はもういないはずなのに、ふと周囲を見回せば、誰もが引き寄せられるように顔を上げ、どこかしんみりとした表情でスクリーンを見つめている。

それは映画のプロモーション映像。

繰り返し見たものなのに、俺も無意識に顔を上げていた。

目に飛び込んできたものは、ゆっくりと地平線に沈んでゆく紅蓮の太陽。

そしてどこまでも続く道。

陸軍の工兵部隊が造った広く長い道の両側には、敗走の途中で力尽きた兵士たちの骸が果てしなく続いている。

赤い日輪を背に、浮かび上がる濃いシルエツト。

血に汚れた包帯が乱雑に巻かれた足元から、手製の杖にすがりつくようにして歩いて行く後姿にパンして、静かに流れる少女の歌声がサビの部分にさしかかった所で、若い兵士の顔がアップになる。

少女の歌声が、若い娘のそれに変わる。

兵士の唇がかすかに動き、その声に唱和する。歩き続ける兵士の頬を流れる涙。

そこにオーバーラップするのは、赤とんぼが群れ飛ぶ夕焼け空を、少年と少女が手をつないで見上げている日本の原風景。

『早くも興行収入五十億円突破！ 今年最大の話題作！ この悲惨

さ、この愚かしさ、そしてこの切なさ、これが日本の戦争だ！』
無粋なコピーが大きく映し出され、画面に見入っていた人々はつと
したように現実に引き戻された。

続いてスクリーンに映し出されたのは、さっきスタジオで収録した
ばかりのトーク番組の一部だった。

「俳優の柳瀬裕也さんをスタジオにお招きしています。初の主演映
画は封切りと同時にトップを独走中。今日は映画に対する思いや撮
影時の裏話などを……」

「やっぱり裕也よ！」

スクリーンの中の司会者の声に、目の前の少女の声が重なった。

どんなに顔を隠しても、笑顔で映画の話をしている柳瀬裕也が身につ
けているものを見れば、俺が本人であることは一目瞭然だ。

チラチラとこちらを見ていた連中が、一斉に手にした携帯をこちら
に向けた。

写真を撮られるのはかまわないが、いつまでここにいれば良いのや
ら。

（まいったな）

心の底からそう思った時、クルマのクラクションが耳をつんざいた。
救われた思いで振り返ると、吉田比奈が懸命に手を振っていた。

45・恋人

目の前のガードレールを飛び越えた途端、脱げたキャップに若い女の子が殺到する。

「裕也！」

「裕也君！ こっち見て！」

悲鳴にも似た声のする方に笑顔でひらりと手を振って、俺は車の運転席に滑り込んだ。

「何だよ、この車？」

ドライブとはお世辞にも言えない速度で車を走らせながら、苦虫を噛み潰したような顔で助手席を流し見ると、吉田はケロリとした顔でこう答えた。

「トヨタのセンチュリー、知らないの？」

俺は片方の眉を持ち上げた。

「知らないはずがないだろ、俺が聞きたいのは、1千万円以上する黒塗りの高級車に、なんでお前が乗っているのかってこと」

こっちは大真面目なのに、吉田は楽しげに笑い出した。

人前ではいつもすましているくせに、二人きりである時は笑ってばかりだ。

「何がおかしい？」

わざと不機嫌に訊ねると、「あのね」と小声で囁いて、耳元に唇を寄せてきた。

ふわりと漂う香りは、先日、俺のマンションから勝手に帰ったブルガリの「プールオム」。

ふっとかかる息に、びくりと震えた。

二人しかいない車内で、内緒話をする必要なんて全くないのに、耳

が弱いことだっただけで知っているはずなのに、知ってて、わざとやっているのだ。

俺と彼女には、互いにしか見せないいくつもの顔がある。

ふざけてみせる。

甘えてみせる。

すねてみせる。

繰り返しキスをして、互いの服を脱がせ合って、朝まで抱きしめあうこともある。

今は大臣にまで上り詰めた吉田の父親がいつも目を光らせているから、大々的にマスコミに取り上げられることこそないが、世間に言わせれば、俺たちはとんでもなく不釣合なのだという。

そんなことは、誰よりも俺自身が知っている。

才色兼備の風紀委員と、素行不良の落ちこぼれ生徒。

たまたまクラスが同じという以外には、何一つ共通点のなかった俺たちは、悪夢のような事件をきっかけに付き合い始め、五年を経た今、ようやく恋人らしくなってきた。

意識不明のまま病院に運び込まれた時、警察や病院の関係者は、保護者の連絡先がわからず頭をかかえた。

すでに真夜中になっていたし、捕まった体育教師は錯乱状態。

制服を着ていたから高校の名前だけはわかったけど、携帯がぐちゃぐちゃに壊れていた上に、学生手帳すら持っていないくて、それ以外のことは何もわからなかった。

だから、所持品の中に電話番号を走り書きしたメモを見つけた時は、迷うことなくその番号に電話した。

電話に出たのは吉田比奈だった。

メモは、吉田が俺の制服のポケットにそつと滑り込ませたものだっ
た。

46・コンテスト

「人生にシナリオなんてないんです
そうだな。」

本当にそうだ。

ほんの短い間だったけど、黒田と色々な話をした。

俺はあの男がくれた言葉の一つひとつを、宝物のように大切にしている。

「柳瀬、芸能人になれ！」

病室が隣同士だった如月一樹のひとことを、俺は下らない冗談だと笑い飛ばした。

如月は退院してからも、サッカーボールを小脇に抱え、ふらりと病院に遊びにくる。

俺を中庭に呼び出して、得意のリフティングを見せ付けながら、気が済むまでばかりかばかしい話をして帰って行くのだが、その行動の真意は見当もつかない。

「お前は百年に一人の逸材だ！ 隠し撮り写真がブログに大量にアップされているのがその証拠だ。ストーリーまがいのファンが大勢いることは間違いない！」

「ストーリー……ね」

心当たりのある俺はベンチに腰掛けたまま、冷めた目でサッカー少年を見上げた。

その目付きが気に入らなかったのか、ひときわ高くボールを空に蹴り上げた如月は、情けなさそうに片手で顔を覆ってみせた。

「ああ、ああ、もう少しテンションを上げろよ！ これでも俺は親友として、お前のことを心配しているんだぜ。入院費用やたちまちの生活費は賠償金で何とかなるとしても、それだけじゃ、これからの人生は渡っていけないぞ。いいか、世の中で金の儲かる職業と言えば、何と言っても漫画家、スポーツ選手、そして芸能人だ。そして、お前は芸能人に向いている！」

こいつは俺の親友だったのか。

耳慣れない言葉に気をとられていたせいで、後半の方はほとんど耳に入らなかった。

だから、携帯を向けられた時も、怪訝な思いで首を傾げただけで、その時、撮られた画像の一枚が、すごく適当なアピールポイントなどと一緒に某コンテストのサイトに掲載されたことを知ったのだった。ずっと後のことだった。

「なんでそこまで!?!」

「おもしろいからに決まっているだろ?」

一次審査を通過した俺は、運賃と宿泊費は出してやるからと言う「親友」に連行されて、二次審査の会場に向かった。

吉田には何も話さなかった。

わけのわからぬコンテストの付き付き添いなんて、一人いれば十分だ。

松葉杖をついて現れた俺を見て、面接官たちが身を乗り出した。

質問は事件のことに集中し、全くやる気のない俺は、聞かれたことに淡々と応えるだけで、終わってしまった。

「力不足で悪かったな」

本気で悪いと思っっているわけではなかったが、形だけ殊勝に謝ると、如月がっかりするどころか、ガッツポーズを作ってみせた。

それどころか。

俺は二次審査を通過して、コンテストを主催する雑誌社の人気投票でも勝ち残り、上位十名のうちの一人として最終審査の舞台に立たされてしまった。

特技披露と自己アピールの順番が回ってきて、眉間にシワを寄せたまま固まった俺の顔を、ずらりと並んだ芸能プロダクションの連中が、値踏みするように見つめている。

怪我の方は、松葉杖がなくても歩けるぐらいに回復していたが、激しい動きはとても無理だ。

いっそのこと投げ出してしまいたかったが、芸能プロダクションよりもさらに厳しい顔をした如月が観客席の真ん中に座っている。

熱い友情には応えてやりたいが、ダンスとか、楽器演奏とか、華やかなパフォーマンスを見せ付けられた後だけに、俺はいささか途方に暮れていた。

「柳瀬君は何を見せてくれますか？」

如月をちらり一瞥してから、俺は覚悟を決めて微笑んだ。

「泣きます。一分間だけ」

突拍子もないことだったのか、会場が妙な感じにざわめいた。

俺は無言で目を閉じる。

黄色い歓声が飛び交っていた会場が、嘘のように静かになる。

再びまぶたを持ち上げた時、潤んだ俺の瞳から、ゆっくりと涙がこぼれ落ちた。

47・友

『前代未聞！ 1分間のパフォーマンスで女性審査員がもらい泣き
！』

誌面に躍る文字と俺の写真とを見比べて、無邪気に喜んでいる「親友」が何を考えているのかは理解できない。

だが、わかっていることもある。

手抜きの一発芸でグランプリを獲得した俺は、あり得ないことに、審査会場に来ていたほとんど全てのプロダクションからオファーを受けた。

「彼女には？」

「話した」

「で、どうだった？」

興味津々の瞳を向けられて、俺は相手から目を逸らした。

「おめでとぅって言われた」

「それだけ？」

「それだけ」

「東京に行くんだろ？ 遠恋は続かないからな」

しれっとした顔でそんなことを言う。

自分の部屋の中でさえ、ボールをもてあそんでいるサッカー馬鹿を、一発殴ってやるうとこぶしを固めた時、軽やかなノックの音がした。俺はあわてて座りなおした。

ケーキと紅茶を載せたお盆を手に、にこやかに部屋に入ってきたのは如月の母親だった。

「カズ君、お父さんから言付かったものがあるでしょう？　ちゃんとお渡ししなさいね」

「人前でカズ君って呼ぶな」

「はいはい、そうだったわね」

息子の言葉をさらりと聞き流し、母親はこちらに向き直った。

「柳瀬君、元気になって良かったわね。それから、グランプリおめでとう。家族みんなで応援しているから、がんばってね」
そんなことを言われたのは初めてだった。

「ありがとうございます」の「ござ」まで言い終えた所で、イチゴを突き刺したフォークが、ぬっと目の前に伸びてきた。

「お前が美形だから、おふくろ、猫かぶってるんだよ。他の友達を呼んでも、こんな上等なケーキなんか、絶対に出てこない」

すました顔でイチゴを頬張っている息子の頭を、カラになったお盆で最後にポカリと殴った母親は、何事もなかったように、上品な微笑を残して部屋を出て行った。

「さすがはお前の母親だな」

「それって、ほめてんの、けなしてんの？」

「もちろん、ほめてんだよ。俺なんか自分の母親から無視されまくりだ。一度ぐらい殴られてみたいかも」

ぼろりと漏れた本音に、如月がきゅつと眉を寄せた。

俺の母親は結局一度も見舞いに来なかった。

そのことは、病院関係者の間でも、入院患者の間でも、ずっと話題になっていた。

「で、言付かったものって、何？」

うつむいたまま、巨大なイチゴを頬張っていた如月は、俺の言葉に

救われたように立ち上がり、部屋の隅っこに何となく置いてあった紙袋の中身を、俺の目の前にぶちまけた。

それは、様々なプロダクションから送られてきた手紙だった。

病院宛のものだけでなく、直接、俺に宛てたものもあつたけど、患者に精神的な負担をかけてはいけないということで、病院側が保管していたのだという。

「ほとんどがスカウト目的だ。あの事件が報道されて、あちこちのブログに写真が掲載され出した時から、お前は目を付けられていたんだよ。体育教師に嫉妬されて、殺されかけた美少年なんて、芸能界が放っておくものか。でも、どうせなら、コンテストで選ばれて華々しくデビューを飾った方がおもしろいだろ？ あっ、でも、八百長はやってないぜ。お前をグランプリに選んだのは、スカウトマンじゃないんだからな」

俺は思わず頭をかかえた。

「お前はいつから、俺のプロモーターになったんだ？」

髪の間から相手を救い見ると、如月はにと笑ってみせた。

「隣の病室に間違えて入って、寝ているお前の顔を見た時からだ。男にときめいたのは、きつとあれが最初で最後だな」

呆れて相手の顔を見た。

それにしても、サッカー少年らしからぬ策士ぶりだ。

加えて言えば嘘つきだ。

如月の父親は、雇われ医者なんかじゃなく、俺が入院していた総合病院の医院長だった。

48・神はいると思う

くすぐったさに耐えながら、吉田の内緒話を聞き終えた俺は、不機嫌を通り越して悲壮な面持ちになっていた。

思った通り、黒塗りの高級車は吉田の父親のものだった。

吉田は免許取立てで、おまけに少し方向音痴だ。

一千万円を超す高級車であれば、多少は運転が稚拙でも周囲が大目に見てくるだろうという、子煩悩な父親の判断は悪くない。

だが、今日中に車を赤坂の議員宿舎に戻しに来いというのは、一体どういう見なのか。

「素直じゃないから、車のことにかこつけただけなの」

俺の心を読んだかのように、吉田がすかさず口を開いた。どうやら彼女の父親は、俺に何か話したいことがあって、ずっと機会を狙っていたらしい。

吉田比奈は、広島を離れた俺の後を追うように、こっちの大学に進学した。

今では家族全員が、赤坂の議員宿舎に住んでいる。

俺が議員宿舎に足を踏み入れたのは、後にも先にも一度きり。

送って行ったついでに、誰もいない家に上がり込んでいたら、外出していた両親が戻って来た。

歓迎されるとは思わなかったけど、いきなり殴られるとも思わなかった。

「出て行け！」と怒鳴る声は吹き荒れるブリザードのようだった。まっすぐドアを差す指が怒りに震えている。

今では大臣にまでのぼりつめた男が、烈火のように怒る様は迫力だった。

父親が激怒するようなことは何もしていない。

でも、吉田比奈は、本当に両親に愛されているんだな。

そう思うと不思議と腹は立たなくて、じんじんと痛む頬を押さえながらも、俺は素直に感動した。

雨がやみ、車がスムーズに流れ始めた。

高品質のカーオーディオから流れてくるのは、フランク・リストの「ラ・カンパネラ」。

ドラマチックな旋律に耳を傾けながら、夜景を見たいというリクエストに応えて高台にのぼると、吉田は子供のように目を輝かせた。

「きれい」

夜風に髪をなびかせながら佇む姿が、街頭の淡い明かりの中で浮かび上がって見える。

（夜景より君の方がずっときれいだ）

少し前に出演したドラマの台詞がふと脳裏に浮かんだが、実際はたとえ本当に思っていたとしても、そんな歯の浮く台詞は絶対に出てこない。

肩の辺りで切りそろえた髪は、身につけているものによって、彼女を颯爽と見せることもあれば、少女めいて見せることもある。

シンプルなワンピースの首元にカルチエのネックレスを飾った今日は、いつもより格段に大人っぽい。

「ねえ、さっきの映像、『落日の帝国』だったよね？」

背後から抱きしめようとした時、背中ごしに声をかけられた。

伸ばしかけた手のやり場に困っていた俺は、続く言葉にぎよっとした。

「内緒にしていたけど、初日にみんなで観に行ったのよ。悲しくて切なくて、後半は涙が止まらなかった。でも、その後の舞台挨拶で……」

「みんなって誰？」

あわてて言葉を遮ると、吉田はくるりと振り返った。

「みんなはみんなよ。父と母と私の三人」

につこりと微笑まれて、思わずこめかみに手をやった。

一体、何を考えているのやら。

気乗りしない両親を無理やり引つ張って、恋人が主演する映画を、初日の舞台挨拶込みで観に行くなんて。

『落日の帝国』 手渡された数冊の台本の中にそのタイトルを見つけた時、わけもなく胸がざわめいた。

俺の様子を横目で観察していたマネージャーが、さりげなく声をかけてきた。

「あ、それは出演依頼じゃなくて、オーディション用に送られてきた台本。いちおう持ってきてみたけど、南方戦線で戦死する兵士の役なんて、裕也には全然向かないよ。それにわざわざオーディションを受けなくたって……」

話し続ける声は全く耳に入らなかった。

日本映画界の大御所が、私費を投げ打って制作する大作は、太平洋戦争を背景に描かれる義理の兄妹の悲恋もの。

主演の青年は、学徒動員で戦場に送られた見習士官だ。

絶望的な敗走路。

兵士たちの屍が果てしなく続く道。

沈み行く真つ赤な太陽。

これは、この光景は……。

淡々と話し続ける黒田の横顔が目には浮かび、ページをめくる手がどうしようもなく震え始めた。

事務所が止めるのを振り切って、俺はオーディションに応募した。

取り付かれたように台本を読みふけたおかげで、台詞はすっかり入っていたが、短く切った髪を黒く染め直した俺を見て、審査員たちは不可解な表情で顔を見合わせた。

「主役と言つても、それほど華のある役ではないよ。君のような役者には現代物のラブストーリーなんかの方が、向いているんじゃないかな」

お呼びでないと言わんばかりの言葉をぶつけられて、猛然と前に進み出た。

その時、返したのと同じ言葉を、俺は舞台挨拶でも口にした。

イケメン俳優なんて言われているけど、俺は母親にそっくりなこの顔が嫌いだった。

役者の仕事だつて、生活費の足しになればと始めただけで、大した思い入れがあるわけじゃない。

でも、台本を手にした時、どうしてもこの映画に出たいと思った。

現実には小説やゲームとは違う。

実際の戦場には一人のヒーローも存在しない。

その悲惨さを、その理不尽さを、役を通して伝えることができるなら……。

それは、空しく死んでいった者たちの心を、少しでも引き継ぐことにはならないだろうか。

「父が、裕也に謝りたいって言っていたわ」

「なぜ？」と問の抜けた質問を返すと、いきなり声を張り上げた。

「感動したのよ！ 父だけじゃないわ。母も、私も、あの場にいた全ての人たちが、あなたの言葉に感動したの！」

これ以上、すばらしいことはないともいうように、吉田の声は震えていた。

たしかに、あの頑固親父が俺に謝るなんて、きっとこれが最初で最後だ。

「お嬢さんを下さいと頭を下げるなら、今がチャンスかも知れないな」

呟いた途端、いきなりシャツをつかまれた。

「ほ、本気なの？ それとも……」

もちろん本気。

そう答える代わりに、可憐な唇にキスをした。

ふわりと漂うブルガリの「プールオム」。

宝石箱をひっくり返したようなゴージャスな夜景。

幸せすぎて、怖くなることがある。

恵まれすぎていて、後ろめたくなることがある。

（なあ、本当にこれで良かったのか？）

不安な思いで問えば、黒尽くめの男は笑ってうなずくだろう。

この世に神はいないと、黒田ま吉は言った。
でも俺は、いると思う。

了

48・神はいると思う(後書き)

どうなることかと思いましたが、何とか完結することができました。
最後までお読み頂いた方に心よりお礼申し上げます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2482e/>

ずっと好きでした

2010年11月16日09時41分発行